

# 東北ヘルプ ニュースレター

2023年クリスマス号

巻頭言 1頁

新しい知見とイメージの力：「大川小学校」の教訓 2頁

|                      |     |
|----------------------|-----|
| はじめに                 | 2頁  |
| 1. 徳水博志さんと「大川小学校の悲劇」 | 4頁  |
| 2. 「3.11」で喪った親友      | 5頁  |
| 3. 大川小学校の「津波」被災      | 7頁  |
| 4. 現地で・現場で考えること      | 8頁  |
| 5. イメージの力            | 9頁  |
| おわりに                 | 11頁 |



「結ぶ 関わる 繋ぐ」 12頁



「コミュニティガーデン 黄金浜おむすび村」の村びらき

「キッズケアパークふくしま」の働きとこれから



～低線量被ばく地域で生きる子どもたちと若い家族に寄り添って～ 22頁



自分で考えるために。理解を更新し共有するために。



福島県キリスト教連絡会（FCC）「放射能学習会」で学んでいること 27頁



|                         |     |
|-------------------------|-----|
| 1. 「FCC放射能問題学習会」について    | 28頁 |
| 2. 「FCC放射能問題学習会」の目的と意義  | 29頁 |
| 3. 具体例1 「甲状腺がん」をめぐる学習   | 32頁 |
| 4. 具体例2 原発をめぐる日本とドイツの比較 | 36頁 |
| 5. 新しい動きと教会の役割          | 40頁 |



惨事ストレスマネジメント 41頁

秋田豪雨災害に関する活動報告書



会計報告・巻末言 45頁



## 巻 頭 言

主の降誕と、来臨を待ち望む季節を迎えております。いつも東北ヘルプのことを憶えて下さる皆様の祈りと支えに心からの感謝を申し上げます。主の平安が皆様の上にあることを心から祈ります。

牧師として働いていると、有難いことに、年ごとに数回ずつ、クリスマスのお話をすることになります。毎年同じ話をしているようで、そうはならないところがおもしろいところです。

クリスマスのお話は、主イエス・キリストが私たちの所に来られたことの祝いの出来事です。神の御子が来られることを通して、神は私たちにご自身を示してくださいました。この世界に私たちの救い主は来られた。主は苦しんで失われていくいのちの、その目の前にいてくださることに、ご自身を懸けてくださったのです。わたしにとってクリスマスのもっとも重要なメッセージはその点にあります。

目の前のいのちから始める。他者に語りかける。単純ですが難しいことです。でもそんな機会を、たくさん作って、また逃さずに関わっていきたいと思っています。

先日、私はある会合に参加しました。ウクライナからの避難民の方のお話を聞く会でした。こんな会に行く予定だと家で話していると、小学校三年の娘が興味をもってついて来てくれました。

お話しくださった三人の方のお話しはいずれも深刻でした。それまで家族と平和に暮らしていた町が変わってしまったこと。穏やかな祝日を過ごしていた市場の真ん中に爆弾が降ってきたこと。戦争によって、姉弟は日本に、母と祖母はジョージアに、そして父は軍隊で1年半を過ごして、愛し合っている家族がバラバラになってしまったこと。そんなことが語られました。私は言葉を失う他ありませんでした。

では一緒に来た娘はこの話になんを感じたのでしょうか。残念ながら娘は日本語しか話すことができません。そしてウクライナの方々は日本語の勉強の最中でした。それでも娘は一所懸命、来てくださった三人に話しかけていました。自分の思いを十分に言葉にできない年齢でもあります。娘から出てくるのは、小学生らしい他愛もない質問です。どんな食べ物が好きか。どんな色が好きか。ウクライナの本で好きなものは何か。話を聞かせる中で、何かが娘の中に響いていたのです。だからそんなふうに分かる中にある何かを言葉にして、その気持ちを伝えようとしていたのです。

会が終わって、帰りの車の中で助手席に座った娘は嬉しそうに笑って話してくれました。「ウクライナの人と友達になれた！」。人はどうしても「他者」との間に壁を作ってしまうものです。ですがその時、娘は軽やかに、その壁を超えて、目の前の人と出会うようになってくれたようです。このことは「子どもらしい」跳躍かもしれないですが、それでもこの日、わたしは大切なことを娘から教えてもらったように思えたのです。

現在(2023年11月)も、悲しいことですが、パレスチナとウクライナでの戦争が続いております。このことを「カメラ」を通してしか知ることができず、また語れない歯がゆさを感じます。きっと日本に住む多くの方が同じだと思うのです。その場にいることができないわたしが、それでもその歯がゆさを抱きながら、それぞれの「現場」に出ていく。そしてお互いの声に耳を傾ける。それが主の業を待ち望む中で、わたしたちがやらなければならないことなのではないでしょうか。

ニュースレターを通して、少しだけわたしたちの「現場」、東日本大震災の、目の前にある、現在の、被災地の話を分かち合ってください。皆さまの祈りに憶えていただければ、そしてもし皆さまがそれぞれの目の前のいのちに向き合う中で、これらの語られた「現場」での言葉の何かが響いておられるなら、わたしたちにとって大きな励みであり、慰めです。

2023年11月23日  
東北ヘルプ理事 阿部頌栄  
(日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師)



## 新しい知見とイメージの力

### 「大川小学校」の教訓

川上直哉

はじめに

2011年3月11日、石巻市立大川小学校に、大きな悲劇が襲いました。大川小学校に残っていた児童・教員のほとんどが津波にのまれて亡くなったのです。学校のすぐ裏には山があり、上り口もあり、子どもたちでも十分避難できたはずなのに・・・という悲劇でした。

「どうしてそんなことに」

という思いを、多くの人が胸に抱きます。しかし、なかなか、その悲劇と向き合うことは難しい。痛みが生々しすぎるのです。

「3.11」の悲劇は、大川小学校だけで起こったものではありませんでした。宮城県全体では、小学生から高校生まで、併せて353名が亡くなった。のです。つまり、大川小学校の74名を除いて279名が、各地域で亡くなった。

「私も、その現場にいれば、同じ判断をしたかもしれない」と、何人もの教師たちが、私に語りました。それで、大多数の教師が「大川小学校」の悲劇を語らない。語れない。語れば、どうしても「批判」になる。——そうして、なかなか、「本当の所」がわかりません。裁判も行われ、結審しました。でも、なお、事柄がはっきりしない。石巻に住んで、たくさんの方々を大川小学校にお連れしている私は、ずっと、そう思ってきました。

一冊の本があります。『子どもたちの命と生きる』という本です。副題は「大川小学校津波事故を見つめて」とされています。たくさんの方が執筆してできた本です。そこに、たった一人だけ、「3.11」当時に現役の小学校教諭だった方がおられました。徳水博志さんでした。



徳水さんには、今年のニュースレター「夏号」に登場いただいていた。「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」の徳水さんでした。復興の矛盾が噴出する現場に立ち尽くし、何度も煮え湯を飲まされる思いを堪（こら）えながら、被災者と行政の分断を連携によって乗り越え、行政を動かし、移転元地（災害危険区域）の「緑化事業」によって復興への足取りを進めておられる。それが徳水さんでした。私たちは今年、何度も「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」に足を運び、たくさんのことを教えていただきました。



徳水さんは『子どもたちの命と生きる』の中に「大川小学校事故から学ぶ『津波防災教育プログラム』」という文章を掲載されていました。徳水さんは、「津波防災教育」を研究・実践しておられたのです。その冒頭、徳水さんはこのように書いていました。

防災教育を始めた動機は、一つ目に 3.11 の大津波で九死に一生を得た勤務校における避難行動への反省があります。二つ目は、児童 74 名と教職員 10 名が亡くなった大川小学校事故への反省です。学校管理下内での事故としては、戦後最悪となった大川小学校事故の要因を探り、防災上の課題を見つけて改善し、二度と同じような悲劇を繰り返してはならないと考えたからであります。三つ目は、地域に帰った子どもたちを救えなかったことへの反省があります。宮城県において小学校から高校（特別支援学校含む）までの児童・生徒の中で、3.11 の津波で亡くなった子どもは、353 名（宮城県教職員組合の調査）です。そのうち大川小学校の 74 名を除いて、279 名の児童・生徒が学校外の地域で亡くなっているのです。勤務校していた雄勝小学校でも、すでに下校していた 2 年生の児童 1 名が亡くなりました。この意味することは、筆者たちが学校で実施してきた教職員主導の避難訓練「お（押さない）・は（走らない）・し（しゃべらない）」は、子どもが地域に帰ったときに役に立たなかったということです。

「復興」とは何かを、今年、私たちは徳水さんにたくさん教えていただきました。そのご厚誼に甘え、現場からの「防災・避難」をめぐるお話を、ゆっくり伺う機会を得ました。

他のどこでも聞けなかったお話しでした。以下、大切に、ご紹介します。



## 1. 徳水博志さんと「大川小学校の悲劇」

——自己紹介をお願いします。

私は1953年に九州の宮崎県で生まれました。高校を卒業して京都の大学で哲学を学びました。キリスト教もマルクス主義も一通り学び、最初に就職した出版社では労働運動による社会変革にも参加してきました。

その社会変革運動の動機とは、人間の理性に信頼し、連帯して、よりよい人間社会を築いていきたいというヒューマンイズムの精神に立脚していました。しかし一方で、人間の理性と人間の努力では解決できない不条理（自然災害や不慮の事故、戦争、病気という苦難）も存在することを自覚していました。それらの不条理は人間の理性では説明不能であり、当時の私はヒューマンイズムの限界という問題にも直面していました。そこから旧約聖書のヨブ記を手がかりに、苦難の意味の探求が始まりました。

最終的にはキリストの十字架の意味に行き着きました。そしてあるキリスト集会で「生けるキリスト」に出会いました。28歳の時です。その時に与えられた聖書の言葉はマルコによる福音書「私の名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである」でした。この言葉によって、主イエス・キリストが私に対して、子どもに仕える愛の実践を求めておられることが分かり、3年後に小学校教員への道が宮城県石巻市において実現したのでした。

——「3.11」の理不尽、そして、その後の「復興」の矛盾。そうした具体的な現場で、それが一つひとつ、意味を持ったのですね。



はい。昔の人が「闇の力」とか「悪魔」という言葉で語ったものの実体を見据えることが、とても大切だと思いました。ただし、信仰を持たずに自分の自我（人間の理性と意志）でそれらを見据えてしまうと、怒りが湧いて来たり、あるいは絶望したりする。理不尽や不条理を見据えて、しかし、怒らず、絶望しない。まずそのまま飲み込む。でも現実を肯定するのではない。「絶対に許されないこと」であっても、この世に踏みとどまって向き合う。「すでに世に勝っている」と言われる主に心を向けて、何をすべきかと主イエス・キリストに問い、その声に聴き従っていく。そうして初めて、道は開けるのだと思います。

## 2 「3.11」で喪った親友

——同じ姿勢で、「大川小学校の悲劇」と向き合ったのですね。

はい。実際、「3.11」は、私個人にとっても大きな苦難でした。最後の赴任地が、妻の故郷である石巻市雄勝町の雄勝小学校でしたが、ここで大震災に遭遇しました。そのとき私は57歳でした。

私たちの雄勝町は、トンネルで河北町の大川地区と直結しています。大川小学校は、私の赴任していた雄勝小学校の隣の小学校だったのです。そこでは10人の教員が亡くなりました。そのうちの4人は、私がよく知っている教員でした。とりわけ、その内のひとり、私と同じ年齢の、まさに親友と呼ぶべき仲間でした。

——そうでしたか。その方について、教えてくださいませんか。

名前は佐々木祐一さんといいました。私が宮城に来てすぐ、教職員組合の教研集会で出会い、話が通じ合った教員です。一緒に教育研究サークルをつくり、一緒に学び合った仲間です。子どもたちに寄り添う姿勢が印象的でした。教育実践でも尊敬すべき実績を残しました。特に「作文教育」に優れていた教師でした。大川小学校の遺族の方々の間でも、佐々木さんは特別、親しまれ尊敬されていたと思います。その彼が「3.11」で亡くなったのです。彼ほど、子どもの立場に立って考える人はいなかった。でも、子どもを救えなかった。なぜなのか。私は本気で「大川小学校の悲劇」に向き合おう、その問いかけに応えようと思いました。

——徳水さんは、そのことを、『子どもたちの命と生きる』の中に掲載された「大川小学校事故から学ぶ『津波防災教育プログラム』」の中に、こう書いておられました。

「俺たちはどこで間違ったのか！ なぜ子どもたちを救えなかったのか！ 俺たちの避難行動を検証して、二度と子どもたちをこのような目に遭わせないでほしい」。これが亡くなった親友や教職員の悲痛な叫びだと思えてなりません。非公式の証言によると、津波に向かって両手を左右に広げて立ちはだかった教職員がいたそうです。それが筆者の親友だったかどうかは分かりませんが、子どもたちを守るためにとっさに取った行動であったにちがいません。全力を尽くしたはずだが、子どもたちの命を守れなかった。その無念さは計り知れません。

是非、そうして探求された「大川小学校の悲劇」の実相を、

お話しくださいますでしょうか。



2011年3月に徳水さんが撮影した大川小学校の様子。

拡大すると、  
屋根に「和太鼓」が  
載っていることがわかります。  
津波の実際を生々しく伝える  
一枚の写真でした。



### 3 大川小学校の「津波」被災

まず、一番大事なことは「ふたつの津波」があった、という事です。「川からの津波」と「陸上を遡上した津波」の二つが、大川小学校を襲ったのです。

——「陸上を遡上した津波」があったのですか。まったく、知りませんでした。



「川を遡上する津波」については、しばしば語られています。しかし、それ以上に、大川小学校を襲った「陸上遡上津波」は、波の高さも高く、流れも速くなっていたのです。それは、大川地区の奥に行くほど狭まった陸上地形がもたらした結果でした。

——なるほど、大川小学校の辺りは、数百年さかのぼると、海であったと聞いたことがあります。もともと、リアスの入江で、海が山に接していたのでしたね。北上川が土砂によって埋まり、今の陸地ができ、大川小学校のあった町が生まれた。





そうなのです。ですから、そこがまた、海に戻った格好になった。それが「3.11の津波」でした。大川小学校の校舎が建つ釜谷地区の地形は、元はリアス海岸でした。「3.11」の津波は、奥に行くほど狭くなる地形のために、さらに高くなりました。大川小の校舎付近では約10mの高さになっています。陸上地形によって津波が増幅した事例として、世界で初めて確認された事例です。

——でも、そうしたことは、誰も気が付かなかったのですね。

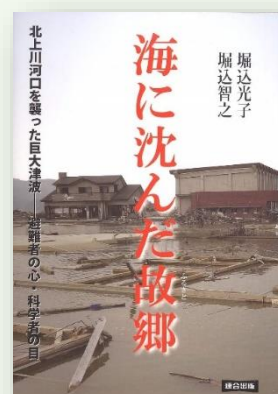
それで、ハザードマップも、そうしたことを想定していなかったと思います。

はい。ですから、当時の教員は私も含めて、陸上地形で津波が増幅することなど誰も知らなかった。実証的な根拠に基づいた科学的な知見を持っていなかったと言えます。

## 4 現地で・現場で考えること

——私も、今、それを初めて知りました。徳水さんは、ご自身でそれを発見されたのですか？

いいえ。「地形で変化する津波の特徴」については、地元の大川地区でコツコツと研究を進めておられる工学博士がおられたのです。堀込智之先生です。石巻工業高校の元教頭先生です。石巻地方の津波被災地を一か所ずつ丁寧に踏査され、足を運び、現場で考察し、記録されました。2013年に著作「海に沈んだ故郷」を出版し、そのご高見を詳細に書かれています。



——現地で・現場で考えることの重要性、ですね。

私が発見というか新しく気づいたことは、大津波警報の意味です。たとえば、「10メートルの津波が来る」と、警報が出たとします。それはしかし、気象庁の特殊な用語で「10メートル」なのです。

——「気象庁の特殊な用語」とは、どういう意味ですか？

実は、気象庁は正確に、きちんとその意味を公開しています。たとえば、今でもネットで読める「防災・避難対策マニュアル」（平成23年9月 大分県教育委員会）には、以下のよう

に記されています。

津波情報の中で発表している「予想される津波の高さ」は海岸線での値であり、津波予想区における平均的な値です。場所によっては予想された高さよりも高い津波が押し寄せることがあります、その旨を津波情報に記載することでお伝えします。また現在の津波予想技術では「予想される津波の高さ」の予想精度は、 $1/2 \sim 2$ 倍程度です。

（下線は引用者による）

——「1/2から2倍」の幅がある！

そうです。ですから、「10メートル」の津波は、海岸到達津波の「平均的な値」ですから、1/2～2倍程度の幅があります。海岸地形や陸上地形によっては、2倍の「20メートル」になることもあります。

海底地震の起こり方や津波の発生メカニズムなどの知識をいくら詰め込んでも役には立ちません。津波が自分の地域を襲う時に、どのようなコースを伝ってくるのか、どの程度の高さでやってくるのかなど、自分の地域を襲う津波の高さや特徴をイメージしなくては、逃げた方を誤ってしまうということです。つまり「新しい知見」を習得して、地域を襲う津波の高さや特徴を「イメージする力」が必要なのです。

## 5 イメージの力

——「陸上を遡上する津波」が、まったく考慮に入らなかった。それはきっと、初動の遅れにつながったかもしれませんが、それにしても、すぐ裏に、山があったのです。いよいよの時、どうして、裏山へ逃げなかったのでしょうか。



初動の遅れは、学校の避難マニュアルに不備があったことです。校庭から具体的にどこに逃げるかを決めていなかったために、子どもたちを50分間校庭に待機させながら、これからどこに逃げるか先生たちの意見が分かれて、まとまらなかったと言われています。

教頭先生を含め3名の先生は、最後まで裏山への避難を考えていました。しかし当日の最高責任者の教頭先生に決定権がありながらも、自分で判断を行うことができずに50分間が過ぎてしまいました。

いよいよ津波が来るということを校庭の先生たちが認識した時ですが、この際も教頭先生は「子どもだけでも山に逃げさせてくれ」と地区住民に言いながらも、地区住民や他の教員からの同意を得られなかったために、裏山への避難を決断できずにいました。

つまり、地域住民を説得するだけの「新しい知見」を持っていなかったということです。

学校側が逡巡しているときに、地域住民の地区長さんから「津波は校舎までは来ないけど、念のため校庭よりも6メートルほど高い三角地帯（堤防道路）に避難しよう」という提案がされました。教頭先生たち学校側は、迷いながらも最終的には地区長さんに判断をゆだねてしまったと推測されています（河北新報社「止まった刻 検証・大川小学校事故」を参照）。

地区長さんたち住民が、なぜ裏山を選択しなかったかといえますと、20数年前までは裏山は崖がむき出しになっており、校庭にまで岩や石ころが転げ落ちていました。その事実を知っている地区住民から見れば、当然余震で山が崩れたり木が倒れたりすると考えても不思議ではありません。

では地区住民が、津波はどのようなコースでやってくるのか、そのイメージを持っていたかと言いますと、過去一度も津波がやって来たという記録がありませんので、今回も津波はここまでは来ないと思い込んでいたと推測されます。地区住民も地域を襲う津波をイメージするための「新しい知見」を持ち合わせてはいませんでした。」

——私たちが持ち合わせている知見には、どうしても、限りがありますね。

学校の教師は、子どもの命を預かっているのですから、絶えず最新の知見を学ぶ必要があります。つまり、「新しい知見」を身に付けられないことには、地域を襲う津波を「イメージする能力」が身に付きません。1名の助かった教員が、「こんな大きな津波が来るとは思わなかった」という証言を残しています。この証言は重要なヒントを残しています。

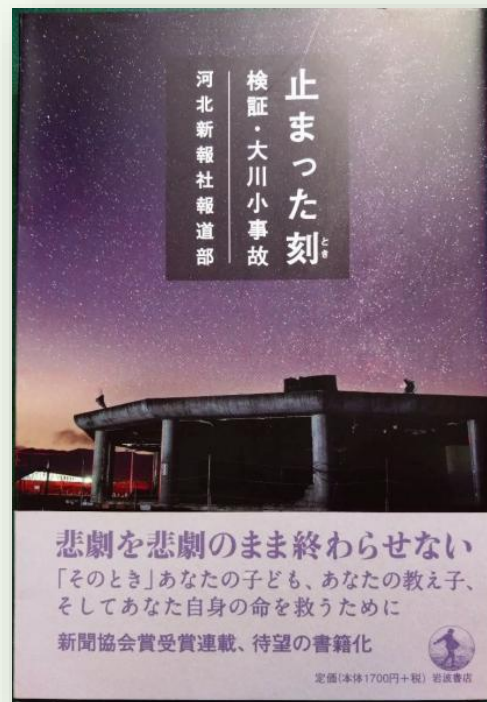
つまり、大川小学校を襲う津波の大きさのイメージを持っていなかったということです。

その当時の教員は私も含めて全員がそうですが、津波の大きさをイメージするための「新しい知見」を持ってはいませんでした。

何回も繰り返しますが、地域を襲う津波の大きさや特徴をイメージするためには、先ほど私が述べてきた、「新しい知見」が必要です。

- ① 大津波警報10mの意味とは「平均的な値」であり、津波の高さには1/2から2倍程度の幅あること、
- ② 津波は海岸地形や陸上地形・構造物で高くなる（掘込智之）。  
この二つの新しい知見を身に付けておくことが重要になります。

この「新しい知見」を身に付けておくことで、危険予知能力と危険回避能力が発揮されるわけです。つまり正しく迅速に、意思決定ができるわけです。



——私たちの知見は、どこまでも限りがある。だから、本能のようなものを活用しなければならない。そのために必要なのは「イメージ」なのですね。それがあれば、意思決定者の責任で、助かる命も生まれる。

おわりに

——私は、原発被災時に何が起るのか、具体的に、たくさん、聞き取りをしました。それは、想定されることは全く違う事でした。その具体的な事実を知ることによって、きっと、次の原発事故の際に生かせる「イメージ」が得られると思って、できるだけ発信を続けています。かつて「アンガージュマン」という言葉がありました。日本語では「責任看取」と訳すそうです。起きた悲劇を、できるだけ正確に語りなおし続ける。それは一つの「被災者責任」だと思っています。今回、私は「津波」のイメージを新しくする機会を得ました。それをこのニュースレターで発信できますことを、本当にありがたく思います。

大川小学校の問題は、哀しいことに、遺族と石巻市との間で裁判となりました。その判決は、厳しくも大事な言葉を残しました。仙台高等裁判所は、教育行政及び管理職と一般教員に対して、「事前防災の重要性」と「地域住民の平均的な知識・経験よりも高いレベルの防災知識の必要」を提言したのです。私の津波防災教育プログラムは、この提言に応える内容であると考えています。これからも「防災教育」を展開していきたいと思っています。

——今日は本当に、ありがとうございました。



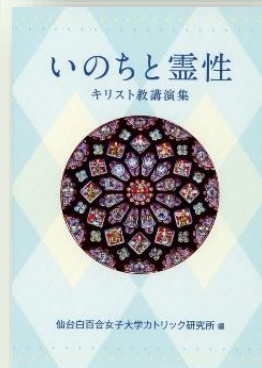
**原発事故の実際のイメージをお伝えする講演・書籍として、**  
**右上から時計回りに**

右上: 2016年の講演  
<https://xfs.jp/Pg8T1>

左下: 2019年の講演  
<https://x.gd/Ap1Ed>

上左: 著書『被ばく地フクシマに立って』  
 (2015年、ヨベル)

上右: 講演集『いのちと霊性』  
 (2023年、教友社)  
 所収の川上講演



# 「結ぶ 関わる 繋ぐ」

「コミュニティーガーデン 黄金浜おむすび村」の村びらき

ニュースレター「2022年イースター号」の最後に掲載した、小さな記事があります。そこでは、2022年3月2日に小さな祈りが石巻市の津波被災地・渡波（わたのは）で捧げられたことの報告がなされていました。

石巻市渡波は、2011年3月11日の津波で壊滅的な被害を受けた地域です。そこはしかし「住居が建てられない災害危険区域」とはなりません。大きな道路が、再び整備されました。瓦礫は片づけられ、壊れた住居は撤去され、広々とした「空地」が広がりました。そしてそこに、徐々に新しい住宅が、点々と建てられて行きました。

渡波地域は、冬になると強い風が海から吹いてきます。寒い東北の空気の中で、広がる「空地」は荒涼とした雰囲気漂わせます。その地で、私（川上）と、Be-1教会のエリック宣教師、そしてお二人のクリスチャンが、祈りの時を持ちました。

この地に、新しい憩いの場を作りたい。  
この志を、神様が祝福してくださるように・・・

この小さな祈りの時から  
1年半の時間が過ぎました。  
そして、この時の「志」  
は、遂に形を持ちました。

2023年11月15日、こ  
れまでの事を振り返りつ  
つ、最初の「志」を共にし  
たお二人に、ゆっくりお話  
を伺いました。

「復興」の矛盾がたくさん  
痛感される今、ここには  
一つの希望があると思いま  
す。感謝して、ご紹介いた  
します。

東北ヘルプ ニュースレター

ました。結果、「荒涼とした空地」と「新しい住宅」が混在することになりました。その渡波に、憩いの場所を作りたい。黄金浜という地域に、その思いが今、集まって「Love is action」という団体が結成されました。

「石巻市には、同じ志を素晴らしい形で実現した『雄勝ローズファクトリーガーデン』があります」と、「Love is action」代表の栗野さんがおっしゃいます。「そうした憩いの場・緑の庭を作りたいのです」と。



上の写真の一番手前が、栗野さん。真ん中に、「Be-1」のエリック宣教師、「憩いの場」となる「空地」を見つめて

渡波には、「Be-1」というキリスト教支援団体があります。この「Be-1」の皆さんは、「子どもの公園」を渡波地域に設置した経験がありました。2022年3月2日、「東北ヘルプ」は「Love is action」の皆さんと「Be-1」の皆さんをつな



気仙沼の2022年3月10日、本冊子17頁を参照ください。

## 東北ヘルプ ニュースレター

2022年イースター号

- 巻頭言：また、新しい「東北ヘルプ」へ 1頁
- 東北ヘルプ関係地図 2頁
- 被災後の日常に寄り添う  
コミック紹介：じんのあい『星の輝き、月の影』 3頁
- 原発事故被災地では、今  
写真家 飛田晋秀先生 インタビュー 4~7頁
- 計測所事業の ここまでとこれから 8~10頁
- 次の原子力災害への備えとして  
『仙台食品放射能計測所・いのり』10年の歩みを回顧して 11~15頁
- あとがき  
津波被災地の二つの活動 16~17頁
- 会計報告 18頁



——栗野さんは、東日本大震災の時、石巻にはおられなかったんですね。

**栗野さん**

はい。2011年には、内陸部の大崎氏に住んでいたのです。そして、教会のボランティア活動で、津波被災地となった女川町と石巻市渡波（わたのは）に参りました。そして、2014年に移住したのです。支援活動を継続したかったから、でした。

——そして、小杉さんと友達になり、一緒に活動を始められましたね。

**小杉さん**

はい。私自身は、2001年に横浜から引っ越して、石巻で2011年に被災しました。自宅は床下浸水でしたが、所有していた自動車はみんな水につかり、廃車することになりました。親戚には、「流される家の中において、カーテンにつかまって危機一髪だった」という人もいました。



——栗野さん、小杉さんの他に、何人で「おむすび村」の建設に取り組んだのですか。

**栗野さん**

最初、5人で始めたのです。でも、そのおひとりが結婚し、お連れ合いさんを仲間に引き込んでくれましたから、今は6人になりました。団体名は「ラブ・イズ・アクション」と言います。私の以前の仕事仲間がおひとり。それから、クリスチャン仲間の千葉さんご夫妻。小杉さんと私の5人で始めたのでした。

——どんな思い・想いで、更地が広がる津波被災地に

「コミュニティガーデンを」とお考えになったのでしょうか。

### 小杉さん

散歩する人、とりわけ高齢者のために、公園のような場所があって、自由にほっと一休みできるようになればいいと思いました。

### 栗野さん

私は、何とんでも「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」に大きな刺激を受けました。本当に素晴らしいガーデンが、被災地を思う想いを結集して生まれ、展開しています。私たちの身近にも、そうしたものがあればいいのに、と思ったのです。

——去年の3月2日に、栗野さんが「雄勝のガーデンに行きましょう」と言ってくださり、その場で「行こう！」と思い立って、私たち三人で「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」を訪問したのでしたね。その時、私は初めて、徳水さんと出会ったのでした。徳水さんには、今回のニュースレターで、インタビューをさせていただいています。栗野さんの一言が、新しい出会いにつながりました。感謝しています。



昨年早春の「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」  
石巻市街地から自動車でも45分ほどで到着します。

栗野さん

そして、聖書です。2018年の春に、旧約聖書の「エゼキエル書」47章9節の言葉から、ビジョンを与えられていました。そのビジョンの一つの姿を、私は雄勝に見つけたのかもしれませんが。

——「エゼキエル書」のことばは、こうでしたね。

「この川が流れて行く所はどこでも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。この水が入ると、その水が良くなるからである。この川が入る所では、すべてのものが生きる。」

栗野さん

はい。私たちはみんな、休んで、ホッとしないといけません。でも、そうした場所は、だいたいどこでも、お金がかかります。そうした場所もいいのですが、誰でも気楽に憩える、そういう場所を作りたくなりました。そこに来れば「すべてのものが生きる」という感じの場所です。

——そうした思いが、被災地の復旧・復興の工事の中で、強くなったのですね。

栗野さん

はい。本当に目覚ましい「復興」の進捗がありました。つまり、どんどん国道が綺麗に整備されて行くのです。でも、そこから一本、道を入りますと、まだまだ、荒地が点在しているのです。その荒涼とした雰囲気は、「復興」の進捗と共に、いよいよ寒々しく感じられてきました。そうした場所に、さらに「避難道」が整備されることになり、ドラッグストアも新しくできてきたのです。「これはチャンスだ」と思いました。





——つまり、「復興」の矛盾が露呈した現実を切り替える機会を得た、という事ですね。

**栗野さん**

はい。私たちはクリスチャンですから、「祈って始めれば、きっと道が開ける」と信じたのです。

——そして、見事なガーデンが、荒地だった場所の一角に、出来上がりました。

**小杉さん**

本当にうれしく思います。何人もの方々が、買い物や散歩のついでに、私たちのコミュニティーガーデンへ足を伸ばしてくれるようになったのです。これからは、とにかく気取ったものとしなくて、当たり前なものとして、このガーデンを豊かな場所にしていきたいと思っています。

**栗野さん**

ここにきて、人が結び合う。そして人間関係が良くなり、幸せになっていく。そういう豊かな場所になればと思っています。みんなに愛される場所。そうして仲間が増え、助け合うことができるようになっていく。そういう場所を作りたい。それで、ガーデンの名前を「おむすび村」としました。

——「村」ですね。

**栗野さん**

はい。「村」という言葉の響きが良いと思いました。誰にとっても心地よい居場所づくりが目標なのです。

そして、「おむすび」です。「結ぶ 関わる 繋ぐ」ということを、この「おむすび」という言葉に込めました。

——そして、「おむすび村」をつくろう、という思いを一つにした5人が「ラブ・イズ・アクション」という団体を作った。



### 栗野さん

はい。団体の作り方・運営の仕方を勉強しようと、市内のNPOサポートセンターを訪ねました。そうしたら「受益者は誰ですか」と聞かれました。私たちは話し合いまして、「徒歩圏の人たち」「復興住宅に住む人たちが受益者になる活動をしようと考えました。そうした人々は、もともと広い土地を所有して「庭いじり」を楽しんでいました。そうした楽しみを、一緒にできればと願っています。

### 小杉さん

本当に、そうなればうれしいです。あるいは、津波に遭って遠くへ引っ越した人々が、故郷を訪ねてきた時の居場所にも、なるかもしれません。

更に、私たちの活動が持続可能性なものとなれば、あちこちで、同じような「ガーデン」活動が始まるかもしれません。

——雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデンの徳水さんたちが、栗野さんに大きな刺激を与えた。それがさらに、新しい刺激を生み出し、被災地の緑化事業が進む。荒廃した場所が、緑豊かな場所になる。素晴らしいイメージですね。



「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」は、無料のコンサートを定期的に行い、津波被災地・雄勝を離れた多くの人に、故郷を思い出すきっかけづくりをしておられます。

小杉さん

私たちはクリスチャンです。クリスチャンには、広く繋がって行ける力があると思います。クリスチャン同士でも、そしてクリスチャンではない方々とも、繋がる。そうして多くの方々を巻き込んで行けるのだと、活動を通して力づけられています。

栗野さん

そして実際、協力者が、すでにたくさん与えられています。地元新聞の記事が、また一つのきっかけになりました。たとえば「お米屋さん」や「海苔屋さん」が、「おむすび村であれば、是非手伝いたい」と言ってくださいました。とりわけ「結ぶ 関わる 繋がる」という意味を「おにぎり」に見ている点、まったく同じだから、手伝いたいと言ってくださったのです。

種郵便物認可

石巻かほく

2023年(令和5年)11月15日(水曜日)

日刊(月曜休刊)

石巻・渡波 「黄金浜おむすび村」23日披露会

被災住宅跡地に庭手作り

市民グループ「誰でも憩える場に」



東日本大震災の津波で被災した石巻市渡波黄金浜の住宅跡に、市民グループが庭を手作りしている。「コミュニティガーデン黄金浜おむすび村」と名付け、23日に「村びらき」と称したお披露目会を行う。メンバーは「誰でも気軽に憩える場として、地域の人たちと庭を一緒に育てていきたい」と願う。

場所は渡波黄金浜の市道渡波稲井線沿い(壺土堂石巻黄金浜店北側)にある約100坪の土地。設置するのは市民公益活動団体「ラブ・イス・アクション」で、30、70代の男女らで構成する。

メンバーの友人の自宅があった区画を無償で借り受け、仲間の協力を得ながら7カ月かけて整備してきた。季節の花々やオリーブの木を植え、ベンチを設け、一角では季節の野菜を育てる。

代表の栗野祥子さん(69)は復興支援で石巻地方に通い続けた縁で、大崎市から石巻市吉野町1丁目に移り住んだ。「人と人、内陸と沿岸、異世代を結ぶ拠点を目指しておむすび村と名付けた。今後も定期的に音楽

住宅跡地に設けられた「黄金浜おむすび村」。季節の花などで彩られた



三陸河北新報社  
〒986-0827  
石巻市千石町4-42  
電話 0225-96-0321  
FAX 0225-21-1668  
メールでの情報提供は  
ishinomaki@sanrikukahoku.jp  
河北新報メディアセンター  
〒980-8660  
仙台市青葉区五橋1-2-28  
電話 022-211-1551  
メディア鑑の日  
https://kahoku.news/ishinomaki/  
© 三陸河北新報社 2023

はろけし 大好評!  
お付々ランチ営業中!!  
店内メニュー お持ち帰りできます  
その他各種お弁当、仏事用、お購等、お電話にて承ります  
※配達も可(要相談)  
湖月亭  
国道45号線河北中前  
☎(0225) 62-2755

無料蒸しカキ求め行列 産業祭、多彩行事にぎわう



東松島市 東松島市の農業、水産業、商工業のPRや、生産者の意欲向上などを図るイベント

や四季折々の催しを開きたい」と話す。村びらきは23日午前10時午後3時。つみれ汁や蒸しパン、海藻や野菜、手作りのクリスマス小物などの販売のほか、大型積み木やちんどん体験などができる。子どもコーナーを設ける。午前11時からコンサートがある。庭造りの資金を募るため、チャリティーバザーも開く。家庭で眠っている日用品、食器などの提供を呼びかける(食品を除く)。協力する場合は10日まで栗野さん(090)2985(7846)に連絡する。

——「結ぶ 関わる 繋がる」という段取りで、被災地の復興を  
内実のあるものにし、展開して行ければ、とお考えなのですね。

**栗野さん**

関わりながら繋がっていく。結ぶことできっかけを提供して、関わりが広がっていく。そういう循環が生まれればいいなと思っています。例えば、花を見て、はじめて会う人と花の話をする、という「ささいな事」の出来事が、本当の「心の復興」をこの地にもたらしようにも思うのです。

**小杉さん**

女性だけではなく、男性も、花に興味を持っておられますね。本当にいろいろな人が、このガーデンでつながってくださると、うれしく思っています。



ガーデンの最初の造園はこの丸い花壇でした。

**栗野さん**

東日本大震災がありました時、誰でも「東北は大変だ」となりました。「東北は遠い」ということを、たくさんの方が、どんどん、乗り越えてきました。今後、東日本大震災のような具体的な出来事があった時に、日ごろから人がつながっていれば、こうした具体的な動きは、さらに生まれやすいと思います。まず日常から・まず身近から、人の繋がりを生み出すような働きを展開してみたいと、そう思っています。

——聖書の言葉に支えられて、ビジョンは大きく建てられているのですね。

**栗野さん**

はい。もっと、内陸部と沿岸部をつなぎたい。そう思っています。「遠く」からここに来ていただき、ここの空気を吸って、空を見てほしい。そうしたら、「遠く」のこの場所も「身近」になると思うのです。そのために、この「おむすび村」を使いたい。そうするために、大崎からここへ、私は導かれたと思っているのです。

——地域を変えるのは「よそ者・若者・馬鹿者」だと、聞いたことがあります。栗野さんは「よそ者」としてのご自身の立場を活用されているのですね。

### 栗野さん

本当に「よそ者」としての気づきがあるように思います。たとえばこの土地は「黄金浜<sup>こがねはま</sup>」という地名を持っています。よそから来た私には「なんて美しい・豊かな名前！」という驚きがあるのです。

当たり前昇る太陽であっても、朝、ガーデンに敷き詰められた白いホタテ会をキラキラと照らします。海のように輝くのです。この「白」は、地元の人々にとっては当たり前の「ホタテ」の白なのですが、その美しさに驚かされる「よそ者」の私は、その美しさを何とか活用したいと思うわけです。もうすぐ行われる 11 月 23 日の催事でも、そうした気づきをあちこちに仕掛けてみたいと思います。



——11 月 23 日のイベントは、大きなものになりますね。

### 栗野さん

はい。「おむすび村の村びらき」です。ある人が言っていました。「イベントがあれば、懐かしい人に再会できる」と。イベントが新聞で報道されれば、津波で離れた人々の中に故郷を思い出すきっかけを作ることできるでしょう。実際、私の所に、多くの連絡が入っています。イベントを行う事への反響があるのです。

震災は突然、それまでの家族・コミュニティーを破壊しました。心ならずも故郷を離れた方々が、元気な故郷の「今」を見ることは、大きな励ましになるのではないのでしょうか。「おむすび村」は故郷を離れた方々の「お休み処」としても用いていただければと思います。

——イベントの成功をお祈りしています。今日は本当に、ありがとうございました。

コミュニティガーデン  
みんなをむすぶ  
黄金浜おむすび村  
村びらき

2023 11.23(木・祝) 小雨決行  
10時～15時 ① 渡辺亭黄金浜53-7  
(薬王堂黄金浜 浜北側)

主催  
石巻市民公益活動団体 Love is Action  
後援 雄勝花物語  
協力 円形園芸店 円形造園 雄勝産材店

090-2935-7846(携帯)

「2023年 クリスマス号」

2023年11月23日の午前からお昼まで、「コミュニティガーデン みんなをむすぶ 黄金浜おむすび村」村びらきが行われました。素晴らしい天気で、温かく穏やかな雰囲気に入れ、会場には100名ほどの人が集まりました。

すぐ近くのドラッグストア「薬王堂」様からも「駐車場とトイレは、自由に使ってください」と言っただけなど、周辺地域からのご理解・ご協力を頂いたことも、幸いなことでした。

「おむすび村」を応援するお米屋さん・海苔屋さんのご協力を得て、とてもおいしい「おむすび」が参加者に振舞われました。



会場では、静岡・伊東の浦島浩司さんなど、たくさんのアーティストが出演してのコンサートが行われました。会場脇にはフリーマーケットが開かれ、「べてるの風」のパンなどが販売されました。「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」から徳水さんご夫妻もフリーマーケットにご参加くださり、開園を祝福してくださいました。

新しい出会いがたくさん生まれた 良い時となりました。

(2023年11月25日 川上直哉 記)



## 「キッズケアパークふくしま」の働きとこれから

～低線量被ばく地域で生きる子どもたちと若い家族に寄り添って～

東北ヘルプ理事 大島博幸

(日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会 牧師)

「今日の11時30分現在の参加者は、110名・36組。ボランティアが30名余で、合計140名以上がここにいます！」—そんなうれしいお声をお聞きしました。

2023年11月3日、私は「福島市とうほう・みんなの文化センター」を訪ねました。「コロナ」での休止を経て再開された「こどもあそびば」をお訪ねしたのです。NPO 法人「キッズケアパークふくしま」理事長の栗原清一郎さんと事務局の佐藤あゆみさんに、お話を伺うためでした。

以下、当日の写真を交えながら、栗原さんから伺いましたお話の概要を記します。

おにいさん、おねえさんたちといっしょにたのしくあそぼう！

キッズケアパーク 福島

# こどもあそびば

参加無料

放射線の心配のない場所で親子でいっしょにあそぼうよ！からだとこころがたのしい！

開催時間 10:00～14:30

2023年

- ★第70回 10/21(土) MAXふくしま4F A・O・Z (アオウゼ) 駐車場2時間無料
- ★第71回 11/3(金) とうほう・みんなの文化センター (福島県立文化センター) 2F展示室 無料駐車場有
- ★第72回 12/16(土) とうほう・みんなの文化センター (福島県立文化センター) 2F展示室 無料駐車場有

こどもあそびばコーナー

対象年齢：小学生以下のお子さん、親御さん  
時間内いつでもあそべます！みんなでいっしょにあそびましょう！

大型遊具エアートラック・トランポリン・サイバーホイール  
フォームアニマル (いろいろな動物の形の大きなブロック)  
つみき・三輪車・カラフルロディ・すべりだい

不定期開催 ロディあそび&赤ちゃんの抱き方講座 (講師：CandyCandy/午前中に開催予定) 開催回はサイトにてご確認ください

こどもあそびば活動報告展示コーナー  
これまでのこどもあそびばの様子のパネル展示コーナーです。ゆっくりご覧いただけるスペースをご用意しております。

主催 NPO法人キッズケアパークふくしま  
後援 福島県 福島市 福島県教育委員会 福島市教育委員会

事務局 〒960-8055 福島市野田町1丁目2-10  
福島いずみルーテル教会内 TEL/024-534-8503

●「キッズケアパークふくしま」ホームページ  
<http://fcarepark.wordpress.com/>  
開催情報やお問い合わせはこちら

キッズケアパークふくしま

「NPO法人キッズケアパークふくしま」は東日本大震災後に東北のキリスト教会が連携して作り、子どもたちが放射線被ばくを心配せずに思いっきり遊べる移動式屋内あそびばを提供してきました。幸い時間経過と除染により被ばくの心配はなくなり減りました。今後は幼い時期に低線量被ばくし成長した若者たちが、前向きに生きるために役に立つ情報を得、ボランティアとして子どもたちに授ける良い経験を積み、また国際化が進む今の時代に子どもたちが誰とでも調音よく遊べるようになるのを支援していきます。

### ●「キッズケアパークふくしま」の立ち上げの頃のことを、教えてください。

2011年3月11日の「東日本大震災」とそれに伴う「東京電力福島第一原子力発電所事故」の後、福島県北の牧師たちは「ふくしま教会復興支援ネットワーク」を同年7月に立ち上げました。被災した方々を協力して支援することを目指したのです。そして、仮設住宅へ避難した方々を訪問し、放射線被ばくを恐れようとしている子どもたちを放射線の低い地域へお連れする「保養キャンプ」などの支援活動をしてきました。



栗原清一郎さん

福島県内の大都市としては最も高い放射能汚染に見舞われた福島市では、子どもたちが安心して思いっきり遊べる場所が少なく、そのため遊ぶチャンスを制限された子どもたちの生育が遅れていました。この課題に取り組むべく、私は、原発事故から二年後の2013年7月、私は、子どもたちを守るための活動を開始しました。

当時、福島市の小学生以下の子どもたちは約3万人、そのうち約3千人が家族と共に県外に避難しました。しかし多くの子どもたちとその家族は、放射線被ばくを気にしつつも福島市にとどまり、生活せざるを得ない状況でした。

私たちは話し合いを重ねました。低線量被ばくの環境のもとであっても、子どもたちが心身ともに健やかに成長し、保護者の方々が自信と希望をもって子どもを守り育てて行く、そのお手伝いをするために「キッズケアパークふくしま推進委員会」を立ち上げました。

放射線被ばくは数十年続く課題です。そこでせめて10年間(2023年6月)までは、低線量被ばくの環境下で生活せざるを得ない子どもたちと若い家族を支援し続けることを目標としました。



その後、私たちは2017年12月に「NPO 法人キッズケアパークふくしま」を設立し、多くの方々のご支援を頂きながら、現在に至っています。

## ●「キッズケアパークふくしま」の具体的な活動について、教えてください。

原発事故由来の放射線による「低線量被ばく」の環境の下で生活している子どもたちのために、最初の1年は、安全な屋内・屋外の「遊び場」をつくりたいと思いました。そのための資金を得ようと思い、海外のキリスト教団体や企業などに支援金を呼びかけました。しかし、そのためには10億円規模の資金が必要であることがわかりました。それは簡単なことではありませんでした。しかし、子どもたちを守り健康に育つ環境を提供することは、まさに喫緊の課題でもありました。

そこでできることから始めようと、2014年6月に「1日ないしは半日」のイベントとして、小さな「こどもあそびば」を頻繁に提供することとし、活動を開始しました。最初は限られた数の子どもたちしか参加できない「小規模」なものでしたが、それでも場所を借り、トランポリンやエアトラック、サイバーホイール等の大型遊具を持ち込みました。動物の形をしたバランスボールを使った子どものヨガや親子体操の指導なども行うスタッフを得ることもできました。そうして、移動式の「遊び場」を実施したのです。



最初は市内の教会を借りて、そこを会場としました。実に小規模なものとして始まったのです。すると、徐々に参加者が増えました。それで、借りる会場も広くしていきました。

そうして、月に一度のペースで「移動式屋内遊び場」を提供できるようになりました。福島市とその周辺の子どもたちと家族に、放射能を心配することなく思いっきり遊べる環境を、定期的に手狂できる体制が整ったのです。また福島大学の菅家礼子教授をアドバイザーに迎え、ボランティアの高校生や大学生に、子どもたちへの関わり方をご指導いただきました。その学びと助言を共有した学生ボランティアたちが大活躍するようになっていきます。手はなるべく出さず、しかし目は話さずに見守りながら一緒に遊ぶ——ボランティアの若者たちは、菅家先生から学んだことを、「こどもあそびば」の活動で実践し身に付けて行く。そんな良い循環が起こって行きました。

こうして私たちの「こどもあそびば」は、子どもたちが夢中で思いっきり遊び、家族が不安から解放されて安心し、そうしてみんなが一緒に「ほっ」として楽しめる場となりました。

しかしコロナ危機のため、2020年2月の第65回を区切りに、活動は休止しました。

## ●現在の「キッズケアパークふくしま」は、いかがでしょうか。

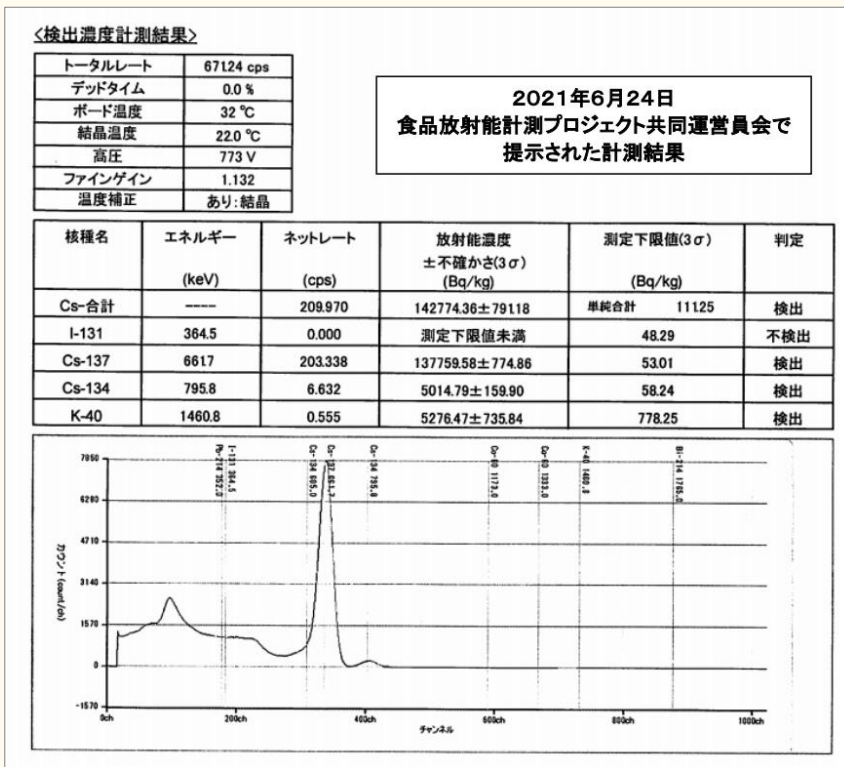
新型コロナウイルス感染症が「5類」に移行したことを受けて、私たちは「こどもあそびば」を2023年6月24日に再開しました。すると300人ほどの親子が集ったのです。会場も駐車場もいっぱいになり、20～30名ほどの方々がやむを得ず帰られたようでした。

そうして今日、2023年11月3日に第71回の「こどもあそびば」を開催しています。今日の総参加者は、午前だけでも140名余・延べ人数で250名を超える人数となりました。福島市内の3つの高校と3つの大学生、教会関係者ら30名以上のボランティアが参加してくださいました。



再開後、少し変わったこともあります。たとえば事務局の佐藤あゆみさんは、「コロナの感染危機のため3年間活動休止していたため、ボランティアでお手伝いくださるスタッフの間で、それまでのノウハウが失われてしまいました。それで、再開時はゼロからのスタートになったのです。加えて、当日の朝は1時間ぐらいしか準備の時間がありませんでした。何か予測しないことがあっても、現場で改めて手順の説明をすることができない、ということが心配されました。それで、今は手順を紙に書いてボランティアの学生たちに渡すようになりました。」とっています。

●これからの「キッズケアパークふくしま」の願いと希望は何でしょうか。



福島駅から2kmの距離にある大島先生のご自宅の敷地内の土壌から  
2021年に「10万ベクレル/kg」程度の放射能汚染が  
確認されました。その後、福島市によって、その土壌は除去されました。

東日本大震災の被災地である福島は、「地震・津波・原発事故」という複合被災地となっています。2011年から12年余が経過しました。原発事故による放射能汚染にも「12年」の時間が経ちました。この間、除染も行われました。そして、放射性物質には「半減期」があります。今、放射性物質が発する放射線量の量は、確かに低くなっています。しかし未だ、日本政府による「原子力緊急事態宣言」は解除されていないのです。「放射能のホットスポット」は、確かに残っている、という現実があります。

そうした中で、「キッズパークふくしま」は、この活動を子どもたちの「全人教育の場」ととらえ、さらに活動を展開して行こうと思います。つまり、

「子どもたちの被ばくをなるべく避け、  
楽しく遊ぶことにより免疫力を高め、  
傷ついた細胞が癌化するのを防ぎ、  
保護者の方々には安心して子育てができるように、  
フェアな情報を提供する。」

という方針で、これまでも活動してきました。これからはそれを踏まえつつ、

「国際全人教育の場を目指す。」

という目標を掲げたのです。

遊び場に来る幼年期と小学低学年の子どもたちに、「肌の色が違って、言葉が違って、ハンディキャップを持っていても、先入観なく交わり遊び、同じ仲間として大切に思う心を養う場を提供する」ことを強く意識して活動を進めて行きたいと思っています。



## ●最後に、アピールなどをお願いします。

ぜひ、ご家族・ご親戚に「キッズケアパークふくしま」の活動を紹介して頂きたい。そして、みんなで参加してほしいと願います。また、ボランティアにも加わってほしいと思います。そうしてこの活動が今後、「子育て支援」として様々な形や場所で広がっていくことを望んでいます。

高校生でボランティア活動をした生徒が大学生になって、新しい仲間と共に参加しています。小学生で「遊び場」に来ていた子どもが高校生になり大学生になって、ボランティアをしてくれています。そして、若いボランティア同士のつながりが広がっているのです。

ヨガや赤ちゃんの抱っこの方法を教えてくれる団体がボランティアで加わり、好評を得ています。教会の英語教師が英語で遊ぶボランティア活動をしてくださり、これも好評です。その他、紙芝居のボランティアなど、様々な団体がかかわりを持って下さり、関係性が広がり、子どもたちを育む豊かな活動となっています。

そうした中で、今、実際に必要なのは、準備と片付けをする人手です。200kgにも及ぶ大型機材を搬出・搬入するために、自動車と人手が必要なのです。いろいろな人が様々な形で関り、加わり、作り上げていくのが「キッズケアパークふくしま」です。参加して下さる人が起こされ、関りが広がれば、子どもたちと子どもたちの若い家族共に歩む活動をさらに続けて行くことができます。どうぞ、引き続き、私たちの活動を覚えて、お祈りください。

(了)



## 自分で考えるために。理解を更新し共有するために。

福島県キリスト教連絡会（FCC）「放射能学習会」で学んでいること

2023年11月15日、Zoomで、3人の方に集まっていただきました。

福島県キリスト教連絡会（FCC）は、原発事故被災地の現場で、「放射能問題学習会」を継続しています。その学習会の意味と、そこで学んでいることについて、中心メンバーにオンラインで集まっていただき、お話しを頂いたことでした。

あの大事故から12年が経ちました。何もわからなかった中から、次第に、たくさんの方がわかり始めています。「放射能の影響」だけでなく「私たちの社会」についても、たくさんの方が、あの事故をきっかけとして、わかり始めました。

東北ヘルプ代表の川上が、3人の方に、インタビューをいたしました、その記録を以下にご案内します。どうぞ、ゆっくり、お読みいただければと存じます。

（2023年11月21日 川上直哉 記）



左上井上儀一さん＝小諸母子ホームステイプログラム 代表。

右上木田恵嗣さん＝郡山福音キリスト教会 牧師。FCC 放射能学習会 世話人。東北ヘルプ理事

左下大島博幸さん＝福島主のあしあとキリスト教会 牧師。FCC 放射能学習会 世話人。東北ヘルプ理事。

右下川上直哉＝インタビュアー・東北ヘルプ代表

## 1 「FCC 放射能問題学習会」について

——大島先生は、「福島県キリスト教連絡会（FCC）放射能問題学習会」の世話人をされていますね。

大島さん

私が福島県に牧師として赴任してから5年になります。すぐにこの学習会にかかわりましたから、4～5年前のことしか、分からないのですが・・・

——ぜひ、そのお立場で見えておられることをお話してください。

大島さん

はい。私が関わらせていただいた最初の頃、読書会は「対面」で続けておられました。「この原子力災害の現場で、実際に対応するために必要な学びを、こうして、ずっと続けておられたのだ」と感じました。教会の信徒の方々も含めて、自由な話し合いをしようとしておられました。牧師以外の方々も、教会以外の方々も、そしてゲストも時々、参加しておられました。それが「コロナ」になって、オンラインでの参加の可能性が広がり、関東地域からの参加者が与えられました。つまり、広い範囲から・遠隔地からの参加がいつもあるようになり、今、学びが広がっていると感じています。

——木田先生は、設立当初からのメンバーですね。補足をお願いします。

木田さん

はい。最初は、原発の問題・放射能の問題が「分かり難い<sup>にく</sup>」ので、本当の所を知ろうと思ひ、学習会を開始したのでした。福島県キリスト教連絡会（FCC）の仲間の中には「理系の大学」出身の牧師が何人かいましたから、その中で勉強会を始めようと思ひました。

——木田先生も、東北大学工学部出身でしたね。

木田さん

はい。そうして勉強会を始めているうちに、だんだん、いろいろな方が加わるようになりました。結局、「私たちの頭でちゃんと判断できるようになりたい」という思ひで、この学習会は始まり、進展したのだと思ひます。

そして、紆余曲折はいろいろあったのですが、「もっと一般の人たちにアプローチしよう」と考えるようになったと思ひます。たとえばビデオを鑑賞したり、実際の見学に行ってみる、ということもしました。

そうしたなかで、この「コロナ」は、大きな転換となりました。「会場を定めて、みんな集まる」という形が取れなくなりました。そして「オンライン（Zoom）で参加する」とい

う事になりました。その結果、会としての広がりを持つたと思うのですが、しかし、Zoomを使えない人もいます。あるいは、一般のクリスチャンにはハードは高くなっているかもしれません。

——井上さんも、もう長く、この会に中心的なメンバーとして  
参加くださっています。

井上さん

はい。こうした会を続けていることは、本当に素晴らしいことだと思っています。いろいろな本を読み、絶えず共通の認識を更新して行く。そうすると、皮肉なことですが、そうした書籍で指摘されている現実が、だんだん忘れられて言っている・問題が見えなくなっている、という現実も見えてきます。そして、改めて新しい目で問題を感じ、問題を指摘できるようになるのだと思うのです。この学習会には、そういう力、そういう知識の共有があります。

——「風化」は、原発事故についていえば、著しいものがありますね。とりわけ、福島県外に住むと、それは本当に、気が付かないうちに、進んでいることを実感します。

井上さん

はい。私も長野県に住んでいますから、よく分かります。そして、このまま忘れられていけば、また以前と同じことになる。そういう現実に対して、この学習会でずっと、絶えず議論している・考え続けて発信しているのです。このことは、貴重だと思いますし、重要だと思うのです。

## 2 「FCC 放射能問題学習会」の目的と意義

——ここまでの皆さんのお話から、  
この学習会の目的は、おおよそ以下のようにまとめられますね。

- 自分の頭で考える
- 一般の人を話し合いに呼び込む・知識を共有する
- 風化に抗う・見えない現実を見えるようにする
- 発信する

木田さん

「自分の頭で考える」という事で言えば、この学習会で、私たちは50冊を超える本を読んできました。それは確かに、私たちの力になったと思います。

大島先生

知識を共有する、ということで、私にとってもこの学習会は大切な時になっています。私は震災時、埼玉県にいました。「当事者」ではなかったのです。そんな自分が当事者となる、ということは、簡単なことではありません。些細なことにも温度差、歴史の受け取り方の差があるのです。そんな私が、学習会に参加しますと、次第にその温度差のようなものが少しずつ埋まっていくような、そんな気がしました。自分の中の理解が深まっていく、という感覚です。

改めて、今、私は「福島にいる」という事の意味を考えています。私は今、原発事故被災地の当事者になっているのです。でも、直接の被災体験はない。そこにある空白のようなものを埋める作業が、この学習会だと思っています。この学習会では、いろいろなことを「そもそも」からお話しただけです。後から来た私にとって、それはとても大切な時間です。話し合いの中で「深い所」へ議論が行くこともあるのですが、必ずいつも「浅瀬」に戻してもらえるのです。あるいは、私のために皆さんが「当然」の事柄を語りなおしてくださっているのかもしれませんが。それが結果的に、共通理解を広く皆さんにもっともらえる機会になっているのかもしれません。

井上さん

そして、積み重ねることで問題の全体像が段々と見えてくるのだと思います。つまり「見えない現実を見えるようにする」という事です。それがまさに「風化に抗う」ということだと思います。

全体像の理解というものは、ひとりでは得られないものだと思います。多くの人がいろいろなレベルで関わり、理解の浅さ・深さの相違も共有する、それが広がりを生み出すベースとなって、そうしてやっと、原発事故という大きな事態の全体像が見えてくるのだと思います。

大島さん

そこに、今後の展望もあると思います。つまり、オンラインも活用して、もっと広く共に学ぶ仲間を増やして行く。その時には「知識の伝達」という事を越えて、一緒に気づきをもって、当事者性を分かち合うことができるような、そういう場になるのではないかと、と思っています。私も「当事者」となれたのです！——そういう出来事が起こる。そういう読書会になるとしたら、そこには重要な意味があると思います。そのためには、「分からない」ということは「分からない」と、普通に言える場でなければ、と思っています。そして、今は、そうになっていると思うのです。自由で、開かれた場であること、それが重要です。それを維持したく思います。

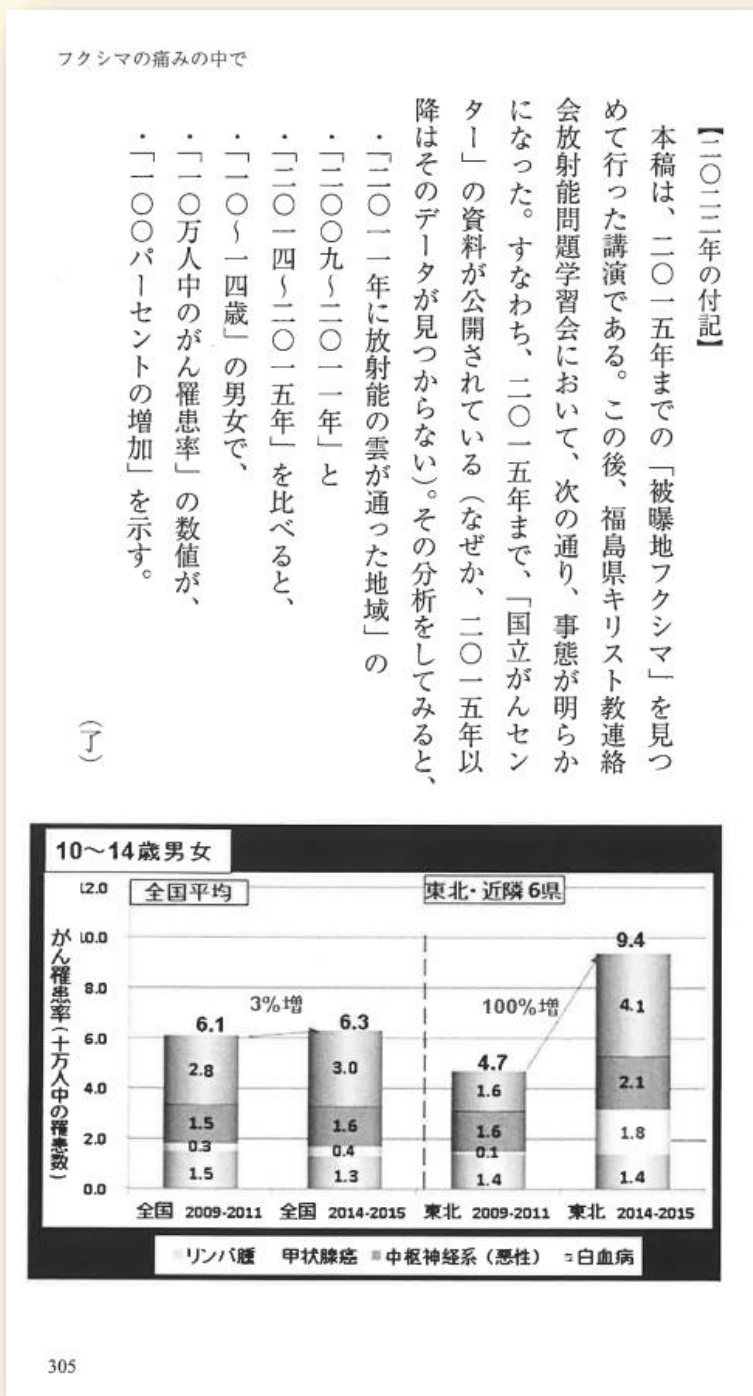
木田さん

井上さんをはじめとして、一緒にずっと、この学習会を継続くださった皆さんがいますね。「子どもたちをどう守るか」を、一緒に考えてきた。そのつながりが続くことのあるがたさを思います。そして、そこに入れ代わり立ち代わり、いろいろな方が参加されて、そして変わらないメンバーもいる。そういう意味で、この学習会は新鮮な会となっています。

—そして、その学びを「発信する」ということでは、私（川上）も、役割を担わせていただきました。

例えば、低線量被ばくによる子どもと女性の「がん」の発症率の増加が顕著にみられることを米国科学アカデミーのデータから確認し、2016年に「日本環境学会」で発表しました。また、2023年には『いのちと霊性』という書籍を上梓し、国立がんセンターのデータに「がん」発症率の増加が示されていることを掲載しました。

ただし、その結果分かったことがあります。それは「人は、データでは、動かない」ということです。私は、学会でも、書籍でも、発表し、少なくない人々に、データを届け、「がん」は、原発事故によって、増えていることを示しました。しかし、そう示されたとしても、普通の人には「見ないふり」を（無意識にしろ）するのだ。と、そういうことを、学びました。



『いのちと霊性』教友社、2023年、305頁



よく似た事例は、「水俣病」をめぐる事例にありました。それは、チッソ株式会社が有機水銀によって環境破壊を起こした事件でした。

この問題は、実は「1920年代」に、漁業権をめぐる議論として、厳しく提起されていました。でも、その詳しい実態が解明されたのは「1950年代」です。戦争があったにしても、それまでに「30年」かかったわけです。あるいは今、私たちはようやくこの段階に至っているのかもしれない。

そして、社会全体が大きく動いたのは「1970年代」です。問題発生から50年・半世紀を要しました。そして、それでも、まだ、十分な手当ができていないとは思えない、たくさんの被害者がなお「取り残されている」のが、21世紀の今なのです。

「水俣病」や「原発事故の被ばく」のような、大きな問題は、それくらい、時間がかかるということだと、そう知らされたことでした。

#### 1916年

日本窒素肥料株式会社（日窒）、水俣に工場専用の港を整備する。

#### 1926年

日窒が漁業被害者に「見舞金」として1500円を支払う。

#### 1950年

「水俣病」が公式に確認される。

#### 1959年

日本政府が有機水銀による「水俣病」を認定。排水処理設備が完成。「処理水」の放出始まる。

#### 1969年

石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』発表。

#### 2010年

日本国首相、慰霊式に出席し謝罪する。

「チッソ」と「水俣病」をめぐる年表

### 3 具体例1 「甲状腺がん」をめぐる学習

——それでは、具体的に、学習会の様子をご紹介いたしましょう。11月も学習会がありましたね。

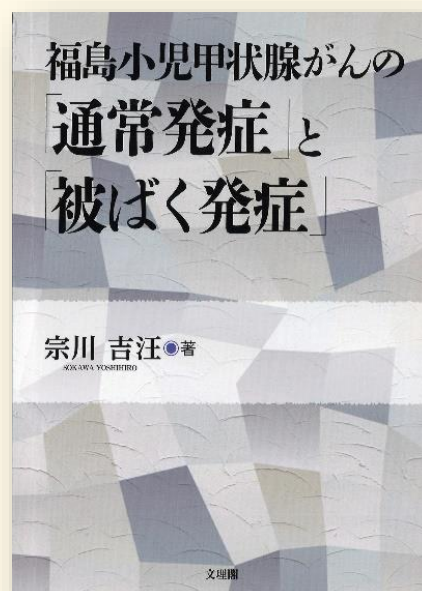
木田さん

はい、私が一冊の本の紹介をし、井上さんが「日独の比較」を主題とした研究報告をしてくださいました。

——木田先生の紹介くださった本は、どんな本ですか？

木田さん

『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』というブックレットでした。宗川吉汪（そうかわ よしひろ）



さんとおっしゃる理学博士が著者です。福島県における小児甲状腺がんの「通常発症」の解析をもとに、原発事故による「被ばく発症」の程度を推定しています。甲状腺がんと被ばくとの因果関係を否定する国・県の姿勢を批判し、すべての患者の救済を訴える本でした。

——この本は、福島県の大規模な甲状腺検査の結果から「甲状腺がん」の発症に「地域差」があることを改めて主張し、そして「原発事故による被ばく由来の甲状腺がん」の発生がどれくらいあったのかを算出したものでした。この「地域差」については、木田先生が、事故当初から注目されていましたね。

木田さん

福島県立医科大学が中心になって行われた甲状腺検査二巡目で、明確な地域差が現れたことは、衝撃的でした。ところが、その後、評価部会は、予想に反して、「性・検査時年齢の他、検査実施年度、細胞診実施率、・・・など多くの要因が悪性ないし悪性疑いの発見率に影響を及ぼしている」として、「現時点において、甲状腺検査本格検査（検査2回目）に発見された甲状腺がんと放射線被ばくの間に関連は認められない」としました。しかも、そもそものデータの「地域分け」が、この時から変更されてしまったのです。データを提示する側（福島県）に、なにか都合が悪いことがあるのでしょうか…。

私もこの「地域差」に注目して来ましたので、手掛かりを奪われたように思いました。検査時年齢による罹患率の変化を「隠れ蓑」にして、「地域差は無い」と結論付けられた。そう思われてなりません。正直に言って、苛立たせられてきたのです。

しかし、このブックレットは、福島県側からのデータの提示の仕方を逆手にとって、見事に、こんがらがっていた糸を解いて見せたのでした。一つのグラフを導き出し、そこから「地域差がある」ことを提示したのです。その上で、このブックレットにおいて「原発事故由来の甲状腺がんが発症している」ということを論証してくれました。

2017年3月に『福島甲状腺がんの被ばく発症』（文理閣）を出版した<sup>①</sup>。本書はその続編である。

前書で、福島の小児甲状腺がん発症に原発事故が影響していることを主に検査2巡目（1回日本格検査）の解析から示した。原発事故後の甲状腺がんの新規罹患率が避難地域を含む高線量地域（13市町村）で最も高く、次が中通りなどの中線量地域（12市町村）、そしてその次が避難地域以外の浜通りと会津地区の低線量地域（34市町村）であった。罹患率に放射線量に基づく明らかな地域差があったことから、以下の図を示して、福島における小児甲状腺がんの発症に原発事故が影響していると結論した（図1）。

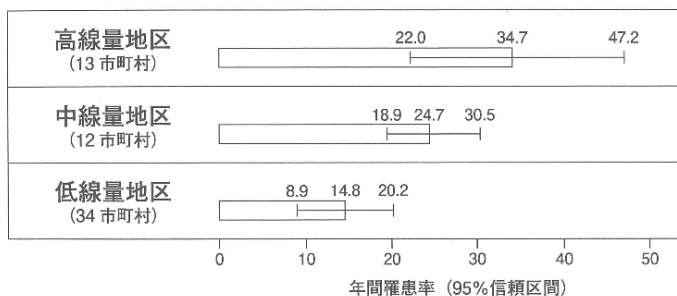


図1 検査2巡目（1回日本格検査）における3地域の小児甲状腺がん年間罹患率

年間罹患率は、1年間で、受診者10万人あたり新たに発症した患者数を表す。図中のバーは95%信頼区間を示す。避難地域の13市町村、中通りの12市町村、その他の地域の34市町村については11ページ表1を参照。

『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』  
文理閣、2022年、3頁

——福島県のように大規模な甲状腺検査をすると、どこであっても隠れていた「甲状腺がん」が見つかる。だから、福島県内で「甲状腺がん」がたくさん見ついているけれど、それは「通常のことなのだ」という結論が出されています。でも、この本は「そうではない」ことを示しているのですね。

木田さん

そうなのです。「通常発症率」と「被ばく発症率」をそれぞれ計算できることを、見事な手法で、はっきりと示してくれました。

——井上さんは、このブックレットをどのようにお読みになりましたか？

井上さん

重要な指摘をしていると思いました。原発事故によって放出された放射性物質は、放射線によって遺伝子を傷つけます。小児がんは、放射線によって傷つけられた遺伝子に、もう一つ別の要因、例えば様々なストレス、そして喫煙などで遺伝子が追加で傷つけられるとがん化します。被曝の影響でがん化のリスクが高まるのです。

しかし、すでに「日本環境学会」で川上さんが報告した通り（右のグラフを参照）、若い年齢であればあるほど、そうした影響は大きく出てきます。原発事故の時、お母さんたちが直感的に強い不安を感じたのは、まったく正しいことだったのです。

右は2016年「日本環境学会」発表資料。広島・長崎の被爆者のデータを基にした米国科学アカデミーの研究成果から、年齢が低いほど、放射能による影響で「がん」が発生しやすくなる、ということを立てています。

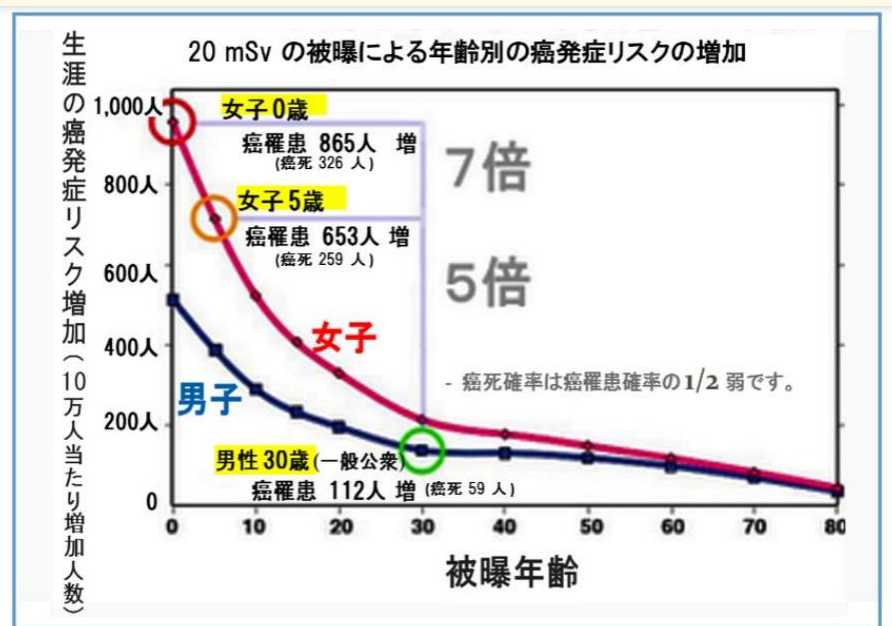


図 BEIR VIIIによる子どもの低線量被曝リスク

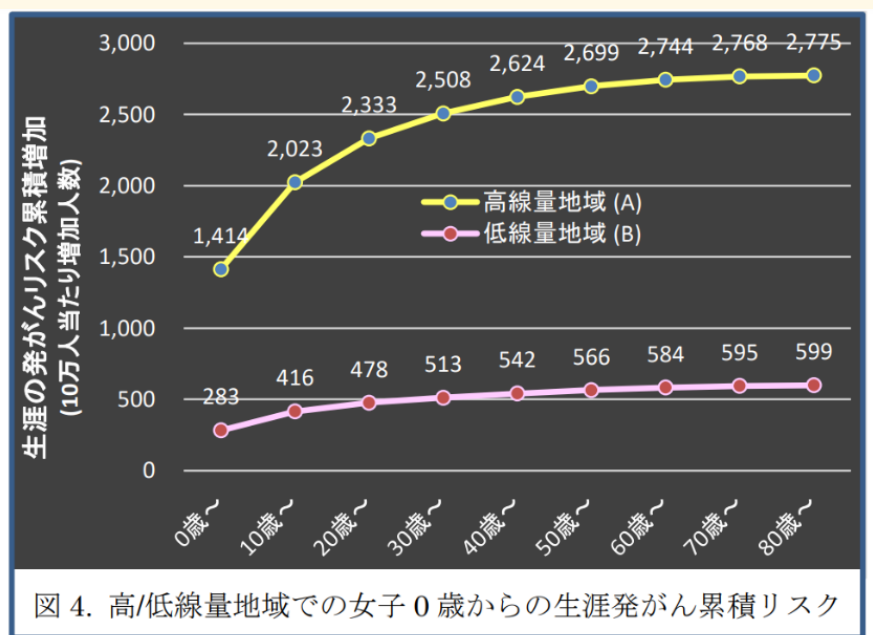
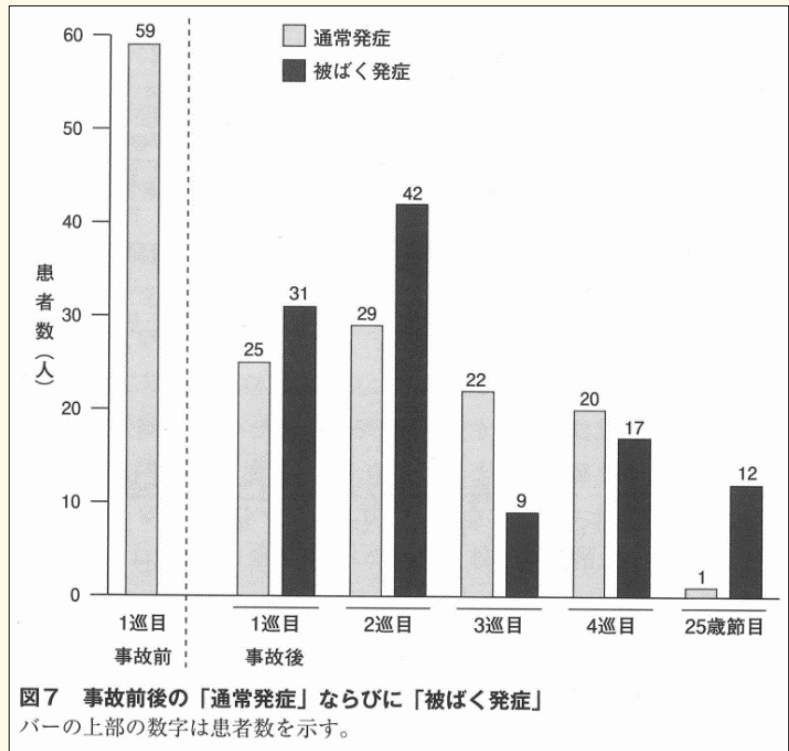


図 4. 高/低線量地域での女子0歳からの生涯発がん累積リスク

原発事故の「被ばく」の影響による小児がんのリスクは、30歳ぐらいまで続きます。このブックレットの図7で、25歳節目検診に被ばく発症が見られるのも、その現れです。原発事故時に10代半ばだった人々の中での、「被ばく由来の甲状腺がん」発生です。ということは、もっと年齢の低いうちに「被ばく」した子どもたちの、これからが心配されます。

——もともと、心配されていた事柄が、いよいよ、具体的に懸念される段階になってきた。

『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』  
文理閣、2022年、30頁



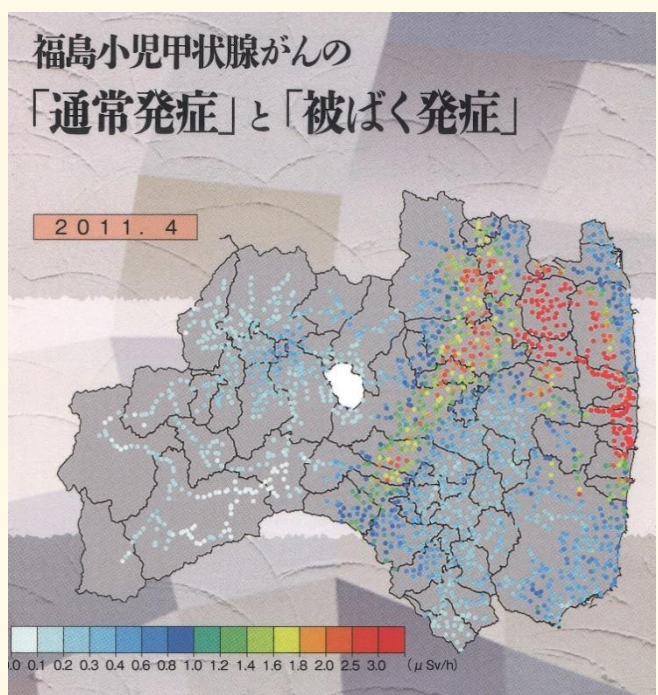
木田さん

このブックレットは「原発事故が起きた時点における甲状腺がんの通常発症率」がはっきり示せることを語っています。そのことによって、「被ばくによる発症」の存在が浮き彫りになる、という事です。

さて、それがいったい、具体的にはどんな意味を持つのか。これからどうなっていくのか。そのことは、このブックレットの次の課題になります。

——原発事故の影響は、本当に、時間をかけて確認されるという事です。その間、被災者は不安の中を生きる。

たとえば2011年の原発事故において、大都市・福島市もまた、放射能汚染が非常に深刻であったことが、このブックレットの裏表紙のイラストに示されていますね。数十万人の人々が、この不安の中を、数十年にわたって生きて行く。このその歩みに伴走するために、こうした研究成果が、大きな意味を持ちますね。福島市で牧師をしているお立場から、大島先生、いかがでしょうか。



大島さん

「甲状腺がん」を巡っては、裁判が始まっています。その記録などを見ると、強く感情を刺激されます。今、このブックレットを見ますと、同じ問題が「数値化」されて提示されています。裁判がどうなろうと、被災者の生活は続くのです。これから、もっと、いろいろなことが起こる。感情も大切だけれど、冷静に事態を見つめることが、長い歩みを進むために、とても大切なことだと思いました。

でも、このブックレットに提示されている「表」は、簡単には読めません。あるいは、川上先生が井上さんと一緒に作った学会発表のグラフも、そうです。ですから、木田先生や井上さんのような方が助力してくださり、「表」を読み取る学びができますことは、本当に貴重なことです。感情に流されて胸を痛める実際の出来事の、その正体をはっきり理解することで、何を見るべきかがわかるように思います。

情報を受け止める、咀嚼する、裏側からも見る。そういうことが、学習会で可能になっています。そして、その新しい理解を分かち合える、ということは、本当に素晴らしいと思います。前回の学習会で取り上げていただけたことは、本当に良かったと思いました。

## 4 具体例2 原発をめぐる日本とドイツの比較

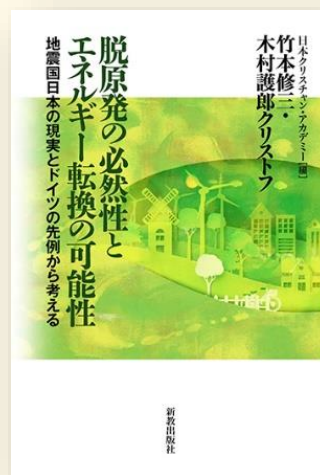
——そして、もうひとつ、井上さんが

「日独の比較」の研究を発表下さっていますね。

井上さん

はい。5月に『脱原発の必然性とエネルギー転換の可能性』という本を取り上げて発表したことがきっかけでした。この本は木村護郎クリストフさんという方の講演録でした。日本とドイツの比較をしている本でした。しかし、私はこの本に「踏み込み不足」を感じたのでした。

それで「なぜドイツは脱原発に進み、日本は原発再稼働に進んだのか」というテーマを設定し、自分なりに研究を進め、学習会で発表させていただいています。



——ご発表は、参加者を勇気づける素晴らしいものとなりました。しかし同時に、日本の問題の深刻さも、よく分かるようにお話し下さっています。

井上さん

重要なこととして、日独の類似性にもかかわらず、原発に関しては正反対の態度をとっている、という事です。日本は「再稼働をしなければならない」という立場。対照的に「脱原発」を国是にしているドイツ、という感じです。日本の政府は、都合の悪いことを隠し

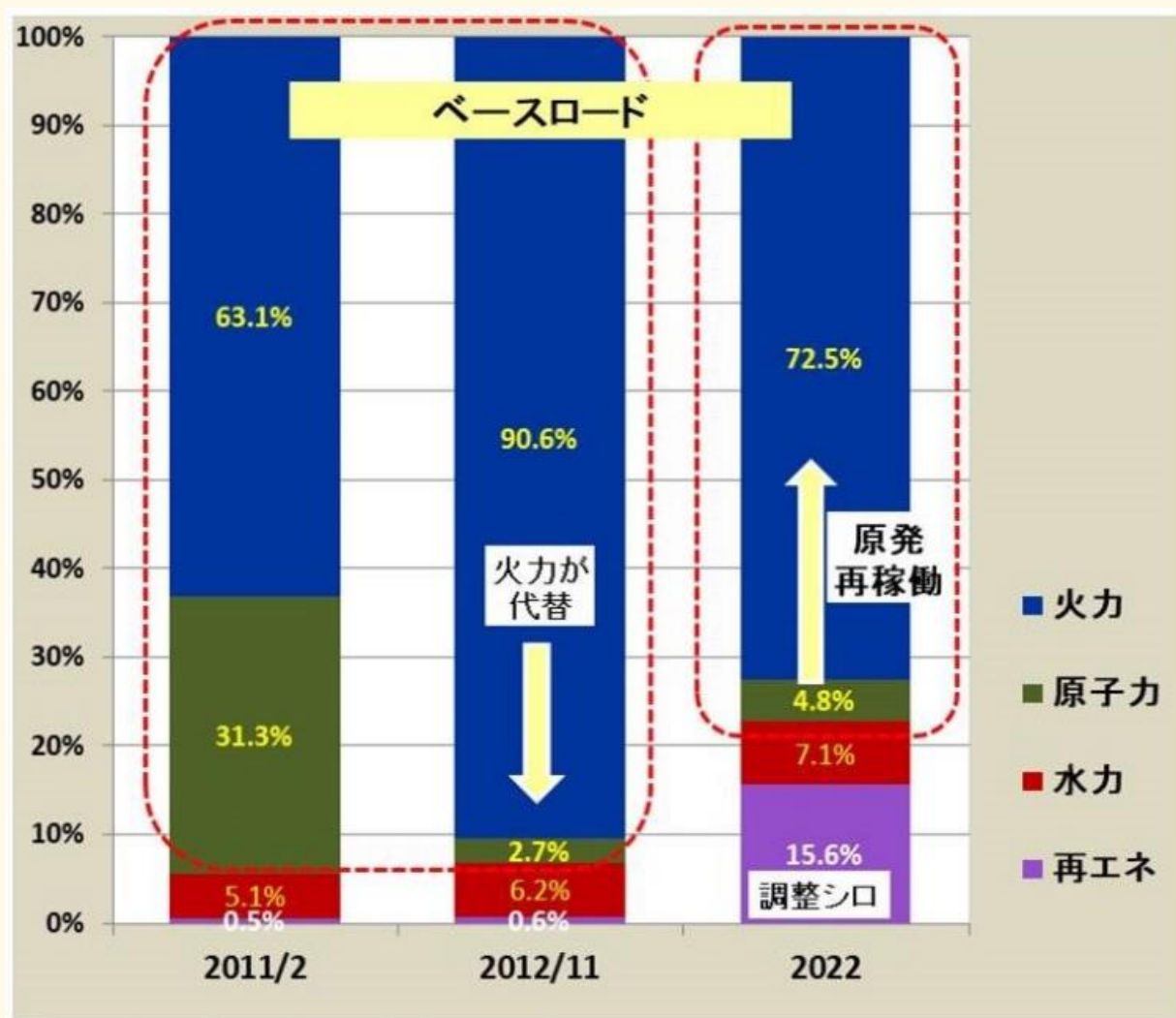
ながら、アメリカ一辺倒の方向で政策を決定している。経済と権力で全てが解決され、それを正当化するために学問がある——という日本の現実があるのです。それとは違うものが、世界にある、ということを示唆してくれているのがドイツでした。

この違いは何か。日本の状況をドイツから見てみると、よく見えるものがあるのではないかと。そう思って研究を始めたのでした。

——その日本の現実を揺るがせにしたのは、やはり、  
2011 年の原発事故でした。その衝撃は大きかったのですね。

井上さん

はい。「ベースロード電源」という政府の言葉があります。発電の電源の割合をどう構成するかを示す言葉です。2011 年を経て、この「ベースロード電源」の中で、原発は激減しました。これは大きなことでした。



しかし「大手の電力会社を中心にすべてが構築されている」という現実、代わりませんでした。「火力発電」が相変わらず中心です。そこに、日本の問題がある。このことがはっきりと理解されたのでした。

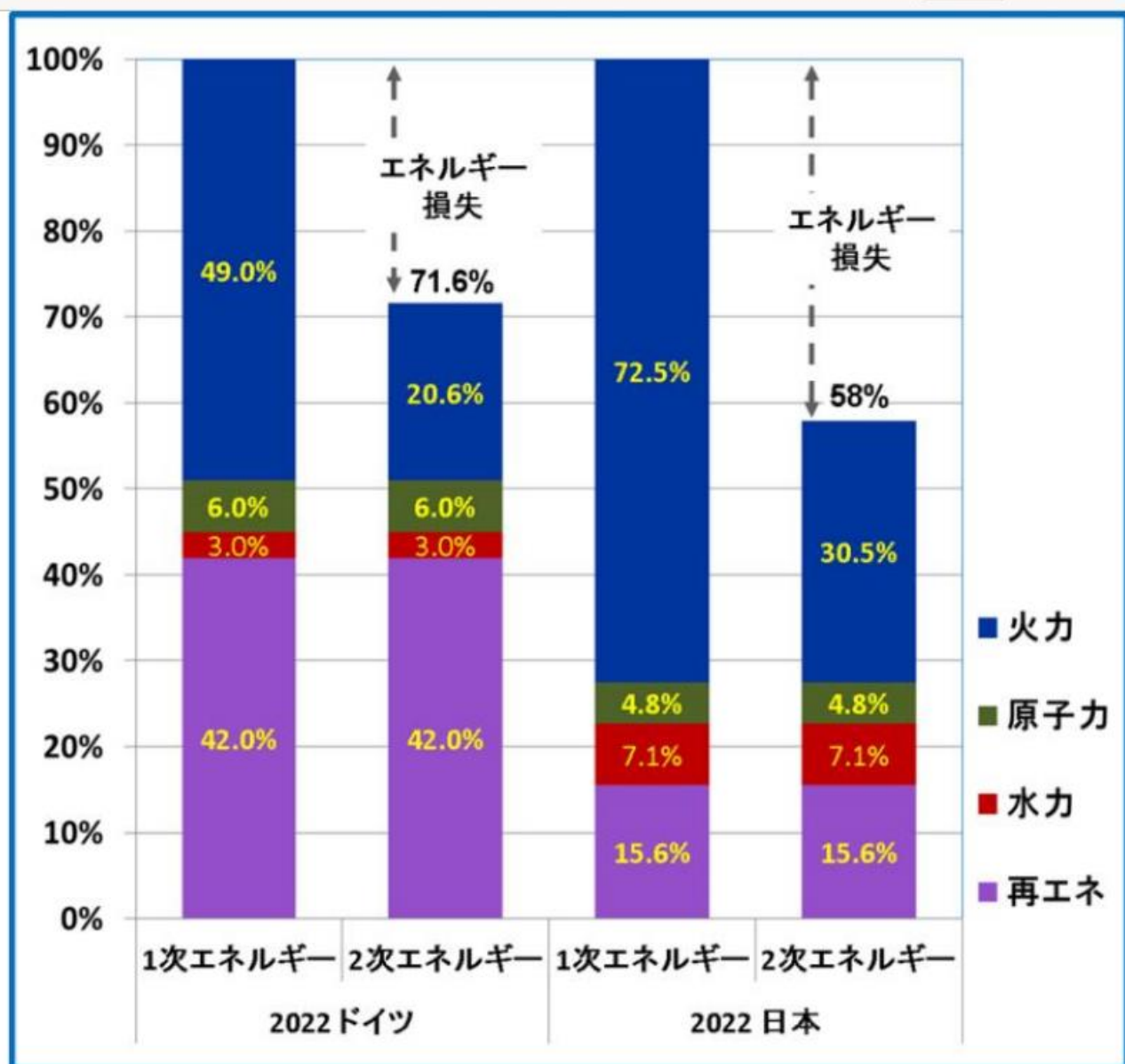
——ドイツは「大手の電力会社」が中心ではない

社会・経済となっているのですね。

井上さん

そうなのです。身近な言葉で言えば、「省エネ」の問題があります。日本では「省エネ」に取り組むのは、ほとんど、一般消費者ばかりです。日本の大手電力会社が固執する火力発電、原発は効率が悪く、多くのエネルギーを捨ててしまっています。ドイツのように、地域が中心になって「再生可能エネルギー」を展開するだけで、エネルギー損失が減り、非常に高い「省エネ」効率が得られます。結果、「地域分散型」に、社会も経済も変わって行くわけです。

東西冷戦が終わって、東西ドイツが統一されて、社会も経済もゼロから考え直さなければならなくなり、大いに苦しんだ中で、ドイツは新しい道を示してくれるようになったのだと思います。



——対照的に、日本は、今、

「大規模集中型の産業モデル」のままで押し切ろうとしていますね。

井上さん

結局、「次世代への責任」と「自然に対しての責任」という倫理的な観点が彼我の差になっているのだと思います。そして、次世代の「元気」に差が生まれています。首都圏に圧倒的多数が集まる日本社会に対して、地域ごとに人口も分散しているドイツ社会の差も、そこにあるのでしょう。日本の「地方」を強化し、若者を「地方」に呼び込む方策を探さないと、未来はないと思うのですが、なかなか、そうなくなっていきません。

——原発の問題を考えると、「科学」の議論をはみ出して、

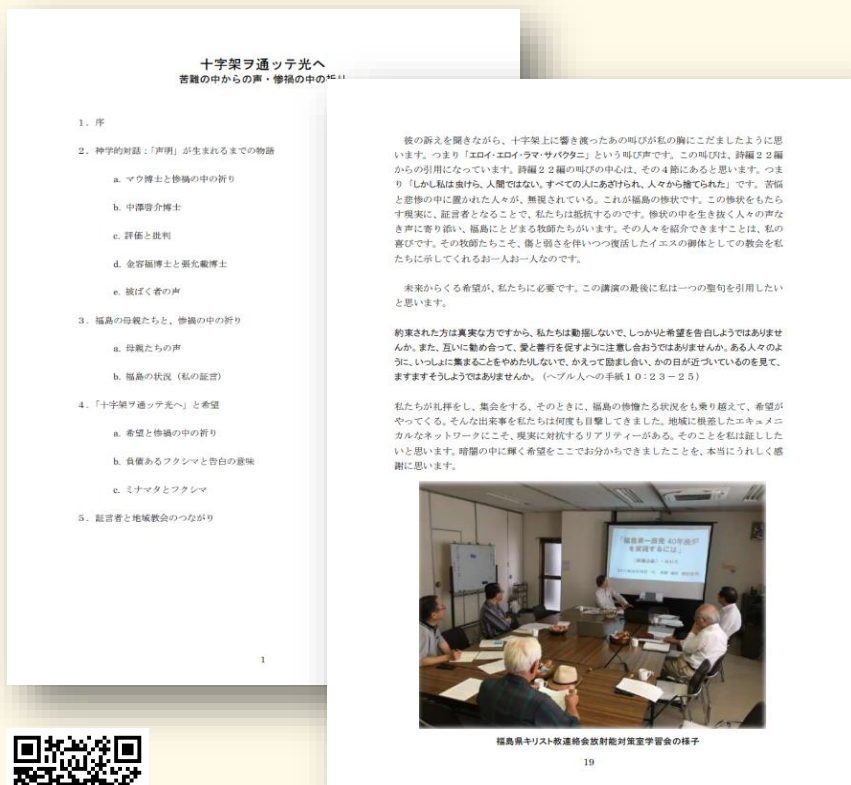
「倫理」や「生き方」の問題が出てくるとい事ですね。

井上さん

その意味で、川上さんがある国際会議での講演で用いられた言葉は印象に残りました。「未来からくる希望」という言葉です。この言葉を「未来への希望」と比べると、その意味がはっきりすると思います。前者と比べて、後者は、暗い現実の中で希望を探さなければならぬ点で、私たちを暗くする言葉だと思います。

——それは、日本聖公会主催の国際会議で私が発表した講演「十字架ヲ通ッテ光へ」の、その結論の言葉でした。そういえば、その結論は、まさに、「福島県キリスト教連絡会 放射能学習会」を紹介するものとなっていました。

なるほど、あるいは、学習会の主催者が「福島県キリスト教連絡会」であることの意味は、その辺りにありそうですね。「科学」の研究にとどまらず、「どう生きるか」を、参加者はみな、一所懸命考えています。それで、井上さんの研究発表に、学習会全体が元気づけられているのだと思います。



<https://xfs.jp/vEUKK>



## 5 新しい動きと教会の役割

——今後のことを、考えています。「大手電力会社」を支えるために「GX（グリーン・トラスフォーメーション）」という言葉が使われています。「再生可能エネルギーへの転換」を大義名分にして、実際には「洋上風力発電」や「メガソーラー」そして「次世代原発」といったものへとお金が出る仕組みになっており、結果として「大手電力会社」を支える社会を延命させようとしていますね。

井上さん

はい。しかし、「メガソーラー」は環境問題を引き起こし、「洋上風力発電」はコスト面で市場競争に敗れつつあり、さらに「次世代原発」については、小型化も、使用済み核燃料の問題も、まったくうまくいっていません。展望すら見えない現状です。つまり「GX」なるものが、絵に描いた餅になってきたのでした。「リスク」ではなく「コスト」が問題になり、「今のまま」では、現実に、立ち行かなくなってきました。

——ということは、今の在り方は、早晚行き詰るのですから、  
新しい時代は、もうすぐ来る。そんな気がしますね。

木田さん

そう感じる私は、今までしてきた学びでは足りない、という事を考えていました。そうした中で、井上さんのご発表に学び、これからのエネルギーをどうするかを考えるようになりました。未来への責任を、倫理の問題として考えるようになったのがドイツであるということですね。そういう議論が日本でも必要だと思う。

「安全だから汚染水を流してよい」という科学の議論ではなく、教会の倫理・道徳を示すこと。それだけではありませんね。日本には日本なりの美意識・倫理だって、あったはずです。私たちの学習会では、そういうことを発言して行く必要があると思いました。

——中央に依存して「長いものに巻かれろ」という意識でいたら、  
新しい時代が来た時に、対応できないことにもなりかねない。

木田さん

はい。「地方の問題」を、今、考えなければならないはずです。新しい時代が来るとしたら、それは「各地域」がしっかりしなければならない。日本全体が新しい流れになる、となれば、教会は、きちんと役割を果たせるのかどうか。

そもそも、東日本大震災は東北で起こったのです。原発問題は「2011年」に転機を迎えたのです。私たちの責任はある。できることは、確かにあると思うのです。

(了)

福島県キリスト教連絡会「放射能学習会」に参加をご希望の方は、  
どうぞ、東北ヘルプまでご連絡下さい。連絡をおつなぎ致します。

# 惨事ストレスマネジメント

## 秋田豪雨災害に関する活動報告書

東北ヘルプ理事 中澤竜生

### まえがき

東日本大震災の発生により、私は支援活動を始めるとを余儀なくされました。ボランティア活動を主体的に選ぶつもりはありませんでした。正直に言えば、自分からこの道を選んだわけではないのです。言葉の選び方には慎重でなければなりません、私は言わばその出来事に押し出されたと言えるでしょう。

私の場合、現地の支援者と、遠方から支援を提供しようとする団体・個人、そして被災者との間に立つ仲介者の役割を担う立場に立つことになりました。この経験から多くの教訓を得ました。今、この教訓を活かすために、「心のケア」に、特に力を入れています。

東北ヘルプへの理事としての参加は、まさにその一環です。「東北ヘルプ」は「支援者を支援する団体」です。私は「東北ヘルプ」との協働に務めています。

### CRASH Japan の「心のケア」セクションとしての派遣

東日本大震災の直後から、キリスト教徒の支援団体である「CRASH Japan (クラッシュ・ジャパン)」が被災地に集結し、緊急支援活動を開始しました。この団体の活動は多岐にわたりますが、特に重要な役割として今に引き継がれているのは「スピリチュアルケア」でした。

2011 年当時、ケアに関する教育が不足していました。深刻な現場の状況が、精神的な負担や人間関係によるトラブルを増加させました。被災者だけでなく、支援者にも負担が大きくなりました。

この問題に対応して、災害から数か月の間に、専門家による心のケアが提供されました。一方で、隣人のケアサポーターとなるための教育プログラムが展開されました。私自身も教育プログラムに参加し、支援者として立つ現場で、そのフォローアップをしています。そのようなプログラムに参加しつつ、同時に私は、被災者の心のサポートを提供しているのです。

「教育プログラム」を展開する活動は「CRASH Japan」の活動として、重要なものとなっています。そして「CRASH Japan」は、東日本大震災遺構、様々な被災地で活動を展開しえきました。今回はその一環として、秋田豪雨被災地での活動があり、私もその活動に参加して、秋田市に二度、向かったのです。その際、東北ヘルプにお寄せいただいたご献金をお持ちしました。以下にその報告をいたします。



クラッシュ・ジャパンのホームページ

#### クラッシュジャパンへの献金口座

ゆうちょ銀行 振替口座 00110-3-290907

名義 一般社団法人 クラッシュジャパン

## 現地の状況から垣間見る重荷と希望

2023年7月14～16日、秋梅雨前線の影響で記録的な大雨となり、秋田市では大規模な水害が発生しました。特に、JR秋田駅周辺で発生した水害は、甚大なものとなりました。下水道や水路からの排水が追いつかずに雨水があふれ出す「内水氾濫」とみられています。

2019年の台風19号による広範囲の浸水被害等、近年、全国各地で大雨が降り、短時間で浸水が発生する事例が増えています。「千年に一度のレベルの雨」と表現されることも多く、自治体は異常気象への対応に苦慮しているのが現実です。今後も大規模災害が続発することが懸念され、住民には不安が広がっています。

秋田中央キリスト教会にて  
写真左がクラッシュジャパンの山尾牧師・右が中澤理事



2023年9月6日、私は秋田市に秋田中央キリスト教会を訪問しました。教会の1階と、別の場所にある牧師館の1階が浸水被害を受けていました。これらの建物は、その土地が盛り上げられていたにもかかわらず、浸水した雨水が胸の高さにまで達した場所もあったのです。

私たちは教会の若松牧師にお話を伺いました。今後も同様の浸水被害が起こる可能性がある、ということから、若松牧師は、教会を被害に合わない場所に移転することを考えたそうです。その思案中に、全国から支援が届いたそうです。「全国キリスト災害ネットワーク（全キ災）」という広域支援団体のスタッフがまず訪問され、それから「CRASH Japan」そして「救世軍」からの安否確認の訪問があったそうです。

すぐに、礼拝堂の土台の洗浄と泥かきが始まりました。現在では、基礎工事の修復が行われ、将来の防災対策も考慮された工事が行われています。

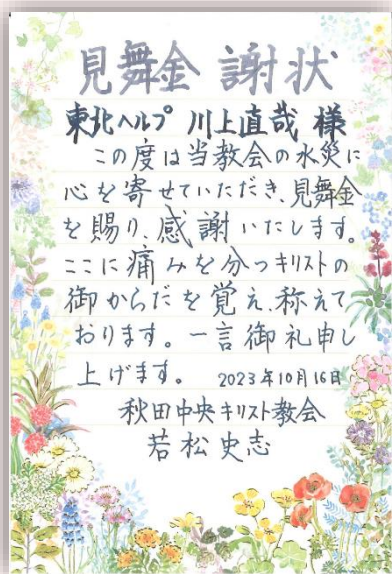
2023年10月15日、私は二度目の秋田中央キリスト教会への派遣依頼を受けました。前回はストレスケアを主題とした聖書からのお話をし、また、災害によって生まれてくる疑問や質問などに丁寧に耳を傾ける時間がもたれました。今回は「礼拝」をしてから、ストレスケアについてお話を聞く時間をもちました。

一人の男性のお話が特に印象に残りました。その方は「一人のクリスチャン」として、秋田中央キリスト教会の復旧作業のボランティア活動にかかわっておられました。遠方から来て、教会堂の修繕と掃除を手伝ってくださったのです。彼自身は、その活動に参加できたことを感謝しておられました。そして「いろいろな教団の牧師先生が、汚れ仕事に汗をかき、這いつくばって掃除をしている姿」に驚いた、とお話してくださいました。彼は修繕された礼拝堂での礼拝に期待し、心待ちにしておられたのです。

一般に、牧師や牧師夫人の働きは教会の「管理者」でもあります。「建物の維持」「経済的な持続可能性」「信徒数の維持」など、秋田中央キリスト教会の若松牧師も、社会的な課題に向き合って、思索し続けておられました。今後も、今回と同様の災害が、再び起こるかもしれない。不安があるのです。多くの悩みを抱えています。しかし、信仰に支えられ、祈りを通じてこれらの課題に立ち向かおうとしておられました。私はその姿を目の当たりにし、深い感銘を受けたのでした。

## ご支援下さった皆さまへお礼

「秋田水害被害支援」の尊い指定支援金を、ありがとうございます。今回、無事に秋田中央キリスト教会へ、献金をお届けすることができました。この報告を、心から感謝と共に、みなさまに申し上げます。また、当教会の牧師である若松史志先生からも、丁寧なお礼の言葉を頂戴しました。再度、皆さまに心から感謝申し上げます。



心を寄せてくださった全国のみなさまと想いを一つにしなが  
ら、秋田中央教会のみなさまと、祈りを捧げました。  
まことに、幸いな時となりました。

## 終わりに

災害は、身体的な被害や物理的な破壊だけでなく、心理的な影響をもたらすことがあります。災害によって引き起こされる心の問題は、個人やコミュニティ全体にさまざまな形で影響を与える可能性があります。以下、災害で起きる主な心の問題を紹介してこの報告を終わります。

### 1. PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder、心的外傷後ストレス障害) :

災害体験者は、その出来事に関連する恐怖や苦痛な記憶、フラッシュバック、悪夢などの症状を経験することがあります。これらの症状は、心的外傷後ストレス障害の兆候であり、治療が必要な場合があります。

### 2. 不安とうつ病 :

災害によって不安やうつ病の症状が増加することがあります。不安は不確実性や危険に対する恐れから生じ、うつ病は希望の喪失や無力感に関連することがあります。

### 3. 社会的孤立とストレス :

災害によって家を失ったり、コミュニティが分断されたりすることがあり、社会的孤立やストレスが増加する可能性があります。これは、心の健康に対するリスクを高める要因です。

### 4. 複雑な悲しみと喪失 :

災害によって家族や友人を失ったり、財産を失ったりすることがあり、これに関連する複雑な悲しみや喪失感が発生することがあります。

### 5. 怒りと挫折感 :

災害への不満や怒り、政府や当局への不信感、復興プロセスへの挫折感が生じることがあります。

### 6. 身体的健康の問題 :

災害によって身体的なケガや疾患が発生し、それが心の健康にも影響を及ぼすことがあります。また、ストレスによって身体的な健康問題が悪化することもあります。

災害による体験は、将来への不安や恐れから生じる「心の問題」を生み出します。東日本大震災を通じて、私たちは PTSD・不安とうつ病・社会的孤立とストレス・悲しみと喪失・怒りと挫折感・身体的健康の問題を「心のケア」の課題として取り組んできました。

これらの「心の問題」は、災害の種類や規模、個人の経験によって、その現れ方が異なります。災害に対処するためには、心の健康に配慮し、適切なサポートや心理的な援助を提供することが重要です。災害対策当局や専門家が心の健康に焦点を当てた支援を提供することで、被災者の回復を支援することができます。今後とも、そうした支援についての研鑽を深め、よりよい支援を提供できるように、現場で励みたいと思います。

(了)

# 会計報告

東北ヘルプ代表 川上直哉

10月30日に行われた理事会に、下の表をもって、会計報告をいたしました。

現在、東北ヘルプは代表が事務処理をし、理事会がそのチェックをしています。

家賃や業務委託費など、恒常的な支出を極限まで減らし、「最低限」の支出で「支援者を支援する」役割を担い、また、被災地の現実を丁寧に発信して行くこと——そのことに、私たち東北ヘルプは、理事・監事全員で、挑戦しています。

今年度は、特にふたつの急な出費に苦しんでいます。一つは福島市に開設したばかりの「福島食品放射能計測所」で、設備の老朽化による大規模な修繕が発生しました。もうひとつは、公用車（軽自動車）が故障し、やはり急な出費に見舞われました。結果として「未払い金」が、現在70万円ほど発生しています。

「年間500万円程度」の予算での運営のなかで、何とか、ギリギリのところまで資金繰りを切り抜けた今夏でした。お支え下さった皆様に、心から感謝しています。

この夏の「緊縮」体制を、できれば恒常化して、早急に「未払い」を解消し、こうした不測の事態にも耐えられる東北ヘルプにならなければと、知恵を絞っています。他方で、被災地の「風化」は、いよいよ進んでいます。できることを、力の限り、最後までやり抜きたいと思います。

とりわけ「東北キリシタンツアー」に参加くださったみなさまに、新しい希望を頂きました。被災地を新しい目で見ていただくことができたと思います。そうした工夫を積み重ね、次回はもう少し、皆様に安心していただける会計報告ができればと思っています。

| 2023年度     |      |                          |           | 2022年度                  |          |           |                 |
|------------|------|--------------------------|-----------|-------------------------|----------|-----------|-----------------|
|            | 献金件数 | 献金額                      | 支出金額      |                         | 献金件数     | 献金額       | 支出金額            |
| 4月         | 39   | 478,339                  | 685,446   | 4月決算                    | 62       | 1,386,871 | 526,129         |
| 5月         | 25   | 576,389                  | 653,840   | 5月決算                    | 6        | 642,225   | 652,120         |
| 6月         | 18   | 648,782                  | 707,291   | 6月決算                    | 14       | 282,749   | 398,923         |
| 7月         | 9    | 144,630                  | 625,156   | 7月決算                    | 12       | 142,500   | 462,672         |
| 8月         | 15   | 138,413                  | 283,208   | 8月決算                    | 19       | 125,547   | 347,602         |
| 9月概算       | 44   | 645,660                  | 558,798   | 9月決算                    | 39       | 549,744   | 567,720         |
| 10月概算      | 17   | 320,720                  | 294,049   | 10月決算                   | 17       | 130,800   | 613,584         |
|            |      |                          |           | 11月決算                   | 21       | 500,000   | 245,890         |
|            |      |                          |           | 12月決算                   | 122      | 1,244,187 | 764,751         |
|            |      |                          |           | 1月決算                    | 60       | 435,878   | 476,036         |
|            |      |                          |           | 2月決算                    | 43       | 409,844   | 620,504         |
|            |      |                          |           | 3月決算                    | 72       | 723,340   | 1,342,622       |
| 10月30日まで   | 167  | 2,952,933                | 3,807,788 | 事業復活支援金                 |          | 1,000,000 |                 |
| 前年同月比      | 99%  | 91%                      | 107%      | 合計                      | 415      | 7,573,685 | 7,018,553       |
| 7月 自動車修理   |      | 217,911円→                | 101%      |                         |          |           |                 |
| <b>進捗率</b> |      |                          |           | <b>2023年 7月27日現在の資産</b> |          |           |                 |
| 日数         |      | 収入 <small>(献金のみ)</small> | 支出        | 通帳1                     | ¥165,782 |           |                 |
| 59%        |      | 59%                      | 76%       | 通帳2                     | ¥294,956 |           |                 |
|            |      | (500万円の予算対比)             |           | 郵貯口座                    | ¥2,951   |           |                 |
|            |      | 自動車修理なしであれば              | 72%       | 振込口座                    | ¥155,891 |           |                 |
| 現在の未払い     |      |                          |           | 合計                      | ¥619,580 |           |                 |
| 計測所        |      | 500,000 円                |           |                         |          |           | ※これは<br>ランドセル献金 |
| 川上借受       |      | 212,095 円                |           |                         |          |           | 実際の所持金          |
| 合計         |      | 712,095 円                |           |                         |          |           |                 |

## 巻末言

東北ヘルプ「ニュースレター」の2023年クリスマス号を、最後まで読みいただき、本当にありがとうございました。

今回のニュースレターには「過去とのつながり」が豊かに現れていました。「コロナ」の断絶・中断を乗り越える「キッズケアパーク」の働きがありました。2022年3月に建てた志の、形を成した出来事がありました。そして、ようやくおぼろげに見えてきた、「甲状腺がん」その他の実際・日本で「脱原発」が進まない理由・大川小学校の悲劇の実相――そうしたことが、今回のニュースレターに掲載されたのでした。

今回、記事にすることができなかったことが、もう一つ、ありました。それも、「過去とのつながり」を知らせる出来事でした。

被災地に届いた「ランドセル」のことです。2022年イースター号で、「2011年3月に津波被災地へと届けられた“中古”のランドセルが大量にあったが、すぐに“新品”のランドセルが届くようになり、結果として行き場をなくしていた」ことを、報告いたしました。そして、そのランドセルを、アジア・アフリカ等の子どもたちが必要としている、ということを知った私たちは、被災地に残されたランドセルを、必要としている方々の所へとお贈りするお手伝いを、始めたのでした。そしてランドセルは、アフガニスタンの子どもたち、日本に難民として来ておられる今後の子どもたち、モンゴルの子どもたち、そしてネパールの子もたちに届けられました。この活動は、国際ワイズメンズクラブのネットワークを活用して展開しました。そして、この活動の中で、仙台のワイズメンズクラブとネパールのワイズメンズクラブが、2023年11月に「国際兄弟クラブ」となることができました。被災地の支援者を支援する活動が、被災地の新しい未来へとつながりました。簡単ですが、ここに感謝して報告いたします。

今回は「写真」を、できるだけ、たくさん載せようと考えました。オンライン印刷が、「カラー印刷」の値段を劇的に下げていたのです。「そんな贅沢な」という古い感覚から抜けられず、なかなか馴染まなかったのですが、少しずつ、新しい現実にも慣れてきたように思います。全国の皆さまと被災地をつなぐ役割を担う「東北ヘルプ」として、新しい環境を活用できればと、試行錯誤を続けています。ご感想などを賜れば幸いです。

「3.11」は、どんどん風化します。しかし、その中で「新しい何か」が、確かに始まっている気がしています。それを、何とかして記録にとどめたい。そう思って、続けてきました。今回も、そのために、本当に多くの方のご協力を頂きました。執筆くださった理事の先生・インタビューに応じてくださった皆様に、改めて深く感謝を申し上げます。締め切りぎりぎりまでお力をお借りしました。本当にありがとうございました。

2023年11月25日

東北ヘルプ代表

川上直哉



## 支援金・献金の受付口座

### 【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

### 【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

# Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : [sendai@tohokuhelp.com](mailto:sendai@tohokuhelp.com)

携帯電話 090-1373-3652